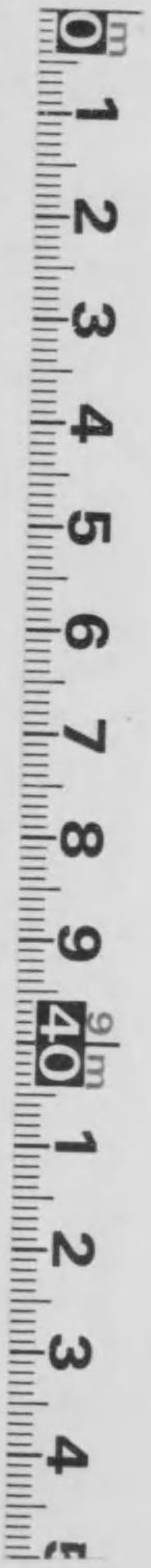


3311  
So15



始





外. 47  
3

~~369.14~~

331.1  
So 15



法學博士  
左右田喜一郎著

經濟哲學の諸問題

東京 佐藤出版部藏版

大正  
7. 5. 16  
購求





月と日とを同じうして、逝きまし  
父母の、一は三回忌、他は拾七回忌を  
記念し、謹み懐かしみて鴻慈を追憶  
し奉る  
著者



Ich bleibe „nunmehr halsstarrig bey meinem Vorsatz mich (durch) keinen Autorfügel verleiten zu lassen in einem leichteren und beliebteren Felde Ruhm zu suchen ehe ich meinen dornigten und harten Boden eben und zur Allgemeinen Bearbeitung frey gemacht habe.“

Kant, an Marcus Herz,  
gegen Ende 1773.

### 序

今猶夢寐忘るゝ能はざる西歐十年の遊學を卒へ、花の都を見すてゝ歸る雁の思ひをなし、日に々々文化の中心を遠ざかる憂愁を抱きてシベリヤの平野を東行し、再び故國の土を踏みたりしは、想ひ起せば早や既に四年の昔なり。爾來思ふところ而して希ふところ、悉く事、志と違ひ、世事紛々、俗事擾々、復曩日の古之學者爲己の境地に悠遊するを許さず、余が學問研究の行程に於て、退歩の跡こそあれ、進趨の趣の認むべきなく、日夜懊惱悶々の情に堪へざるものあり。

本論集に收むるものは、素是一として内的、學問的衝動に驅られ、其の要求に應じて世に公にせられたるものにあらず。皆何等かの意義に於て、外的強制によつて然らしめられたる



ものゝみ、毫も余が學問的良心を満たすところあるに非ざるなり。而かも今若干の訂補を施し、再び之を出して世に問ふ所以は、偶々亡父母の年忌に際し、何物をも捧ぐる事を得ざらんとするは、苟も學界に籍を有する余として到底忍ぶべくもあらざるが故なり。但近時余が趣味の趨く研究題目は、我日本學界に於ては猶未だ多く提唱せられざるものに係るの故を以て、本書又幾分の存在權を要求し得べきを思ひ、纔に以て自ら慰とするのみ。

本書の公刊を機とし、福田徳三博士の經濟學研鑽に對して特に深厚なる敬意を表す。

大正六年初秋

左右田喜一郎

目次

第一編 經濟哲學研究

一 思想問題として見たるサンヂカリズム——……………一—三  
ヘルグソン哲學との交渉……………一—三

二 カント認識論と純理經濟學……………三—四  
附録 左右田學士に答ふ……………七—七  
法學博士 福田徳三……………七—七

三 經濟學認識論の若干問題……………七—一三

四 經濟政策の歸趣……………一三—一四  
附録 無題……………一四—一五

五 經濟哲學の問題……………一五—一八

目次



目次

附錄 經濟哲學の可能性……………一四—一八

第二編 貨幣價值論研究

六 未定稿價值論の一節……………一八—二九

七 貨幣論上の限界效用學說……………二九—三五

第一編 經濟哲學研究



思想問題として見たるサンヂカリ  
ズム——ベルグソン哲學との交渉

„In einer gegen das Sollen (1. A.) [die Werte (2. A.)] vollkommen indifferenten Wirklichkeit oder in einer für die Realisierung des Wahrheitswerthes (1. A.) [der Wissenschaft, an welcher der Wahrheitswert haftet, (2. A.)] ungeeigneten Welt würde ..... jedes Urtheilen seinen Sinn verlieren. So schlieset die Voraussetzung, dass wir durch unser Urtheilen den unbedingten Wahrheitswerth [in dem Gute der Wissenschaft (Zusatz der 2. A.)] realisiren können, schon den Glauben an eine Wirklichkeit (1. A.) [Macht (2. A.)] ein, welche diesen Werth durch unsere Urtheile realisirt, (1. A.) [verwirklicht, (2. A.)] und so wird auch der Sinn alles Erkennens von der Ueberzeugung abhängig, die nicht nur über alles Logische sondern auch über alles bloss (fehlt in der 2. A.) Ethische hinausgeht: die Welt ist so eingerichtet, dass in ihr das Ziel des Erkennens, [die Wissenschaft, (Zusatz der 2. A.)] erreicht (1. A.) [verwirklicht (2. A.)] werden kann.“

**Heinrich Rickert,**

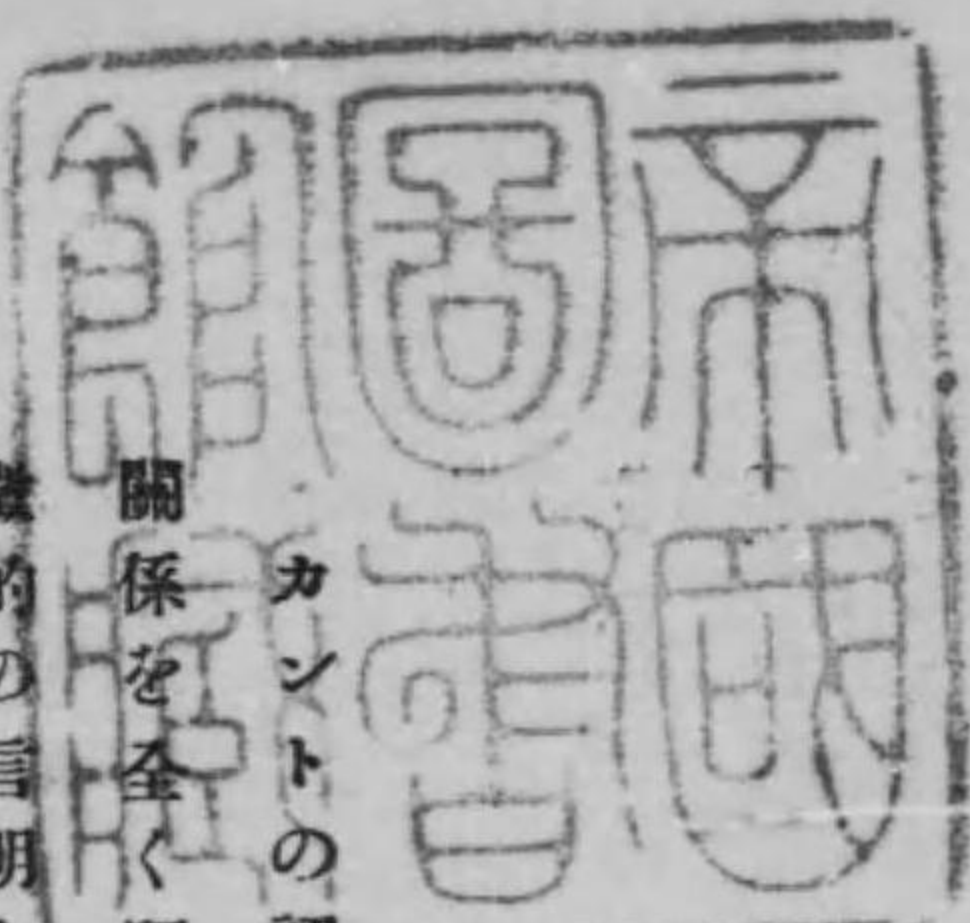
Die Grenzen der naturwissenschaftlichen  
Begriffsbildung. 1902 u. 1913.



大正六年八月發行三田學會雜誌  
第拾壹卷第八號所載同題文訂正

一 思想問題として見たるサンヂカリ  
ズム—ヘルグソン哲學との交渉

(大正六年六月十四日慶應義塾理財學會大會講演)



カントの認識論に於けるコペルニクス的態度によりて、從來の主観、客観の  
關係を全く顛倒せしめられたることは、其の自然概念(Naturbegriff)に於て最も特  
徴的の言明を得るに至つた。從來の客観的模寫的主義に反對する主観的規定  
構成的主義は十九世紀の末葉新カント派、詳しく曰へば就中パーデン派により  
て各の知覺(Wahrnehmung)寫象(Vorstellung)も亦常に判断の形式に齎すことを得  
ると云ふに至つて、最も徹底的の主張に達したのである。而も凡ての判断、凡て  
の認識をして客観的普遍的に妥當ならしむるに當つて、一方にパークレーの稱

思想問題として見たるサンヂカリズム—ヘルグソン哲學との交渉



道する如く、認識論の Egoismus 即ち Solipsismus に陥ることを避け、他方に「物自體」の客觀的實在を想定する形而上學に奔ることを防ぐ爲めには、超個的意識一般 (Bewusstsein überhaupt) に對應する規範 (Norm) 不許不又は當爲 (Sollen) の世界たる、主觀的なる而も客觀的なる超越的價值世界を想はざるを得ないのは自然の數である。此の如くして Sein の界は對して立せられたる主觀主義は、今や Sollen の界を立する客觀主義に到達して、リッターケルト自ら許す如く、超越的心理學的發足點を有したるパーデン派の主張は、超越的論理學的論構によつて、十九世紀前半不遇の裡に一生を終へたる Bolzano (1781—1848) の主觀にも非ず客觀にも非ざる „Satz an sich“ の如き意味の世界を立したる哲學に共鳴を感ずるに至つた。是正に Sein を判斷 (Urteil) に aufösen したる Sollen の哲學の運命である。吾々が此の點に於て考ふべきは、此の如き主觀的にして且客觀的なる價值世界たる不許不と、主觀的に構成せらるゝとする「有」(Sein) との關係及び其の兩者の連續的の交通如何と云ふことである。不許不は有に對しては一個の内容的制約を許さざる形式

なりと論せらるゝ場合に於てのみ其の普遍的妥當性を許すべしと云ふことは、換言すれば不許不に内容が與へられたる瞬間に於て、不許不は不許不たることを得ずとするのであるならば、而して他方に Sein は Sollen に „beziehen“ 係はらしめられて初めて認識闕に入り來るとするならば、永久に而して如何なる意義に於ても、Sein と Sollen との間には、一條の超ゆべからざる鴻溝を横へるものと言はざるを得ないと思ふ。即ち超越的心理學的方法によりては終極に於て Sein より Sollen に導くべき道は斷たれたりと云はねばならない。之がやがてパーデン派の最近の傾向として超越的論理學的方法を思はしめざるを得ざるに至つた深き緣由であると思ふ。

而も是主觀的論理主義の謂は、内在的難點である。更に此の外に超越的難點としては、不許不に照應して構成せられたる實有界を凡て rational のものとして之を Irrationales と對立せしめ、即ち一般的に云ふて Denken und Sein との對立を考ふるときは、カント哲學の主觀主義の窮極は遂にフ・ヒテの自我の哲學に到ら



ざるを得ないのである。フ・ヒテの自我は凡て「自然」の創造者であつて茲に *Rationales* と *Irrationales* とは *Ich* の創造によつて統一が保たれ、思惟と實在 (*Denken und Sein*) とは一に歸し、*Sein* は *Sollen* に導かゝることを得る様になるのである。而も私かに思ふに „*Produkte ursprünglicher Handlungen des Ich*“ たる *Ich* と *Non-ich* との對立はフ・ヒテに對しても亦遂に *unreduzierbar* でなければならぬのではないか。

吾々は十九世紀の後半に於て、殊に自然科学的の實證主義 (*Positivismus*) の裡に、凡てのものを理解せんとする時代を有した。理想を思はずして現實に生きんとしたる吾々は、凡てのものを主觀に歸入せんとしたるフ・ヒテ、さては更に之を理性化せんとしたるヘーゲルに對して客觀的實在を力説せんとしたるは、寧ろ自然の數である。況んやカントによりて確立せられたる批評哲學により試みられたる自然科学に對する犀利なる吟味は、ウキンデルバンド、リッケルトによりて轉じて歴史學の方法論に向けられ、吾等の意識は再轉して此等の學的認識降つて合理的一般認識の捕捉し得ざるポアンカレの語を以てすれば物理學的

知識の根本を形成する *loi brute* に入り得ざる *Irrationales* を奈何せんと云ふ問題に對して、著しき刺激を受けたのである。

新カント派中マールブルヒ派を率ふる *Cohn* の如く思惟を生産的 (*erzeugend*) と考へ、内容をも外部より與へられずして、思惟によつて要求せられ、思惟によつて問題として與へられ (*aufgegeben*)、思惟によつて解決せられ、思惟によつて創造せらるゝこと、恰も數、時間、空間の範疇の如き直觀の形式が思惟の要求から必然的に發展せらるゝものに過ぎぬと同様なりとして、此の問題を解釋せんとしても、思惟が單純なる論理的要求に止る間は如何にして創造せらるべき内容あることを考へ得べきかは問題である。若し然らずして此の場合に思惟の根原 (*Ursprung*) として純粹經驗と云ふ如きものを初めから考ふるならば、吾等の論理は窮極に於て遂に復た抑、思惟と内容を分つ所以として即ち思惟に對して潜在的に與へられたる問題としての *Irrationales* の難問を残さねばならない。

茲に於てか吾等は既に一百有餘年の昔に於てカントが道破したる一句の深



甚なる意味を體得せざるを得ぬ。曰はく「經驗は成程余に教ふるに何が其處にあるか、如何に其があるかと云ふことを以てするが、金輪際其が必ずしも然かなければならず而して決して他のものであつてはならぬと云ふことを以てしなむ」と。(Kant, Prolegomena, Reclam-Ausgabe, S. 73.)

此の問題を解釋せんと勉むるものとして見たる場合に於てのみベルグソンの哲學は其の完全なる意義を有するのである。彼の哲學が認識の問題に於て甚だしく貧弱なりと見らるゝは寧ろ當然であつて、哲學の楯の半面に嚴しく攻め寄せて而して貫くことを得ぬ獨逸哲學に對して、ベルグソンは吾等に對して翻つて他の半面を示さんとするものと云ふてもよい。彼は皮相的假我に對して創造的眞我を力説し、*temps-longueur* に對して *temps-inventeur* を高調し、空間の世界に對して *durée réelle* の世界を稱道し、法則に對して自由を説くは *Irrationales* の純粹持續の流れを體得せんとする努力の結果である。其の方法として彼れは斷續的活動寫眞的論理主義に對して直覺主義を擧げたのである。

要するに獨逸哲學が形而上學に入ることなくして捕捉せんとしたる純客觀世界を、認識の問題に引き入るゝことなしに、*l'évolution créatrice* の世界と直觀せんとしたるに於て、ベルグソン哲學の重要と意義とは見らるゝのである。其の思想を行ふに絢爛華麗の文を以てしたるを嘆賞するは *Wm James* に任せてよい。近世思想の止むことを知らざる理性化 (*Rationalisierung*) の窮極に於て遂に解決を得ざる「純粹持續の自由なる將來の發展を指示したるベルグソンの哲學は正に吾等に一服の清涼劑を給したるものと云はねばらぬ。進み進みて行きづまりたる吾が思想界は種々の方面に於て其の轉回を彼の哲學に求めたのは寧ろ自然の數である。

今勞働問題が十八世紀末の發端より、十九世紀を通じて二十世紀に亙る全運動に於て、遂にサンヂカリズムを起すに至つた徑路を釋ぬるときは、ベルグソン哲學の起るに至つた所以に顧みて蓋し興味淺からざるものがある。

サンヂカリズムは「Utopie」より *Marx, Engels* を經て「*Wissenschaft*」に「發達」した

思想問題として見たるサンヂカリズム—ベルグソン哲學との交渉



る社會主義が Marxismus の眞髓を失ふて Parliamentarismus に陥りたるに對して起つた運動である。サンデカリズムの理論家たる Sorel は其の L'avenir socialiste des syndicats. 1898. に於て主張して曰はく proletariat が從來の社會階級の爲したることに倣ひ例之 bourgeoisie が noblesse の爲に倣ふて革命を成就したる様に、今度は bourgeoisie の爲すことを眞似して見たり、古き政治上の形式を新しき慾望に適應せしめんと努めたり、又各國に於ける第三階級が爲したる如く、利得を獲取せんが爲に公權を掌握せんとするによりて、第四階級は凡ての掠奪から解放されることを得ずと云ふことは今日明に吾等が觀取する所である。第四階級解放の第一義として守るべきことは、絶對的に而して排外的に、彼等は全部労働者として止まらねばならぬと云ふことである。かの職業的代議士となる様な智恵のある人間を引入れて、労働者階級を内部から崩壊せしむる様なことがあつてはならない。かくして第四階級の發展は、道徳上力強き discipline を其の同志の上に行はしむる様になり、第三階級によりて残されたる各種の團體の形式は消滅

する様に勉むることも出来る。一言以て之を覆へば、社會主義の將來は syndicates ouvriers の自發的發展の裡にありと云はねばならぬと(大意)

\* Fr. Engels, Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft.

後來のサンデカリズムの實際上の經過は正に此の立言の意識的發展であるかの如くにすら見ゆるのである。

余が本講演に於て解剖を試みんとするサンデカリズムの方面は其の實際上の經過に於けるものではない。只此の如き實際上の運動あらしめ、又之を解釋する爲めに稱道せられたる Sorel 等の理論あらしめたる所以を、批判的に謂はゞ外部から解剖を試みて而して前述述べたベルグソン哲學との交渉につきて若干の考察を回らして見たいと思ふのである。

サンデカリズムは其の理論の根底に於て理論的分析を排して意志的綜合を稱へ、論理的言説を斥けて「直接行動」を擧げんとするのである。故に資本主義の批評としても Marx の稱道したる階級闘争を以て其の正しき結論なりとし、且之



に附するに或る倫理的價値をすら以てして居る。即ち階級闘争により外部には恐怖心を惹起せしめ、内部には之によりて階級意識を明かならしむるは、他方には第三階級たる *bourgeois* にも亦其自身の階級意識を明確ならしめ、其の行動をして正に至るべき歸結に導くことを得せしむるものである。此の如くして得られたる鞏固なる階級團結の時代により従來吾々が有したる「國家の時代」は代はらしめらるべきものである。國家は階級闘争に於て常に有産階級の利益の爲にのみ活動す、故に財産なき *proletariat* に向つて *patriotisme* を要求するは、要求するものゝ矛盾である。又國家の重要施政の一部たる軍備につきても、之が爲めに受くる *proletariat* の種々の形に於ける日常の痛苦は措いて問はず、非常の場合に於ても保護を受くべきものは有産階級あるのみである。此の如き組織の下にある國家の政務に參し公權を掌握して、他の階級が従來行ひ來つた處を自ら取つて之を行はんとする政黨主義は、其の主義として論難せらるべきことを除いて考へても、其の之を實行し、且労働者を代表する知識階級及び有産階級中の

労働者に對する所謂同情者と稱するものは、實は獅子身中の虫であつて、労働者の解放は労働者自身の事業なるべきことを無視せる爲めに、今日は遂に *Marxismus* の眞意を救ふべからざる墮落の境地に導いてしまつた。故に此の意義に於てサンヂカリズムは *anti-patriotism, anti-militarism, anti-parliamentarism* を稱へざるを得ない。個々の施政に參與することにより現在の制度に對して種々の合法的改良を加へ、其の結果として現出さるべき一個の理想社會は、謂はゞ理論家の仕事であつて、思惟の結果であり、理論的の產物である。そは現在の制度と比較して其の長短を計量し、一を探り他を捨て、生成せられたる一個の構造物である。即ち其の各部分は各部分と調整を保ちて其の處を保持し、且其の部分の全體は一體となつて、他の社會制度と同一の條件を以て論難批議せらるべき理論的の構成的產物とならなければならぬ。其の性質に於て理論的でなければならず、分析的でなければならぬ。此の如く従來の論者が合理的改良を口にし、其の結果として生成せらるゝ理想社會を論ずるは、他方には吾々の有する經濟生活、



經濟狀態を考ふるに當つて、主として各部分々に分析的に論せられ、而して其の部分的改良を合理ならしむる、交換、消費の經濟を主要なる觀點として居ると云ふことを語るものである。

サンヂカリズムは此の如き理論的言説に代ふるに、力を以てし、部分的に合理、非合理を論じ得る交換、消費に對して、全部として考ふるに於てのみ意義ある生産を以てし、革命を以てせんとするのである。各部分的に構造せらるべき *utopie* に代ふるに、分つべからざる全部としての *violence* の *mythe* を以てせんとするのである。理知の明瞭に對して意志の幽暗を説かんとするのである。一方に破壊の強き力を高調し、他方に明かなる過去を以て推すべからざる昏らき將來の創造的生產を力説せんとするのである。崩壞の *mythe* は争ふことを許さざる團體の *conviction* である。行動の言語に移されたる分解すべからざる意志の力の言ひ表はしである。依つて以て労働者の階級意識を明かならしめ、彼等の情緒を刺激し、彼等の理性、彼等の希望を明確にして、勇敢なる前進的行動を敢てせ

しめ、之により窮極の目的として功利主義的改良論者の企て及ぶ能はざる崇高の觀念を體得したる自由人を創造せんとする所以である。所謂 *intuition of socialism* は此くして重要を生じて來るのである。

此の如き破壊のサンヂカリズムは他方に於て又「生産者倫理」を説くサンヂカリズムでなければならぬ。從來の社會主義が倫理問題を考ふるを要せずとしたるは只一個の偏見のみである。Proletariat の道義上の進歩により自己の *sublimity* を感得するは、機械の物質的進歩と同じく必要の事である。Proletariat の望む所は如何にして將來の生産者倫理を建設すべきかを知らんとするに在る。破壊的總同盟罷工の觀念は、恰もナポレオンの兵卒が佛蘭西の永久の光榮の裡に活きんが爲めに其の命を輕んじた如く、吾々の心的狀態を全く神話的ならしめ、之によつて精神上の全勢力を自由人によつて創められ而して保たる、工業狀態の實現の爲めに捧ぐるを得せしむる如きは、正さに生産方法の不斷の進歩を齎さんが爲めに吾々が有するを必要とする夫の感じに似たるものがある。



此の如き神話的感じを有する一團あつて初めて吾等は近世の社會に於て生産者倫理の創造に必要な力を具し得たりと云ふことが出来る。即ち此の意義に於て破壊は生産に連り、創造に續くべきである。

生産創造は人類行動の最も神秘的部分である、最も幽昏なる部分である。如何に考へても、如何に智識が進むでも、如何なる合理的歸納を以てするも、吾等は此の神秘を除き去ることを得ない。嘗てノートルダムノートルダムのゴシック美術につき論じたる或る評家が云ふた如く、天才は其自ら幽昏の裡に發展し而して沈黙と幽闇とを求むるは其の眞の性質である」と。即ち生産は豫想すべからざる將來を其の内に含むで居る。創造は嘗つてそが有せざりし或物を其の内容として居る。而して自我は此の創造の境地に於てのみ眞に自由なりと云ふことが出来る。サンヂカリズムが *violence* の *mythe* を説き *Grève Général* の *Epos* を唱ふる所以のものは、此の幽闇なる生産、創造の文明、自由の境地を *integral* なる不可分の統一として體得せんと努むる力の哲學、行動の哲學を唱ふる所以を説明するものである。

ある。

吾等は此のサンヂカリズムの主張に聽き、翻つてニキイチエの *Diebensch* を思ひ、更に巴里に數多きロダンの彫刻に思ひ沈むるとき、又我日本に、やは肌の熱つき血しほに觸れも見で、淋しからずや道を説く君（？）とか歌つた女詩人ありと聞くにつけても、吾等は之等の文明史上の重要に於ても、思想に於ても全く異なつた人々の間に於て、猶ほ何等かの一貫したる共通の慾求を發見し得ないか。凡ての理知上、論理上及び之によつて基礎づけられたる社會上の諸々の制約を離れて、自由に原始的なる且單純なる或物を捕捉せんとする希求は明に觀取することを得ないであらうか。

サンヂカリズムが一個の社會運動として如何なる意義、如何なる價值を有するかを研究せんとするは本講演の目的でない。此の點に於て我國の先覺學者例へば福田博士は、サンヂカリズムは何等理論的要求を充たすことなきものであつて一方現代產業界に存する深き根本缺陷を暴露すると共に他方佛國經濟



上の衰運が此の如き運動を惹起す程甚しいことを明にするものである」と吾等に教へ、又河津博士は「サンヂカリズムの直接行動は單に破壞的行動に過ぎず、之を以て労働者の位置を高め、幸福を増進するよりは寧ろ階級闘争によりて快哉を叫ばんとするに過ぎざるなり……予輩はサンヂカリズムの如き架空的破壞的主義が兎に角社會の一隅に起り勢力を張りつゝあるを以て歐米諸國の社會的基礎が崩壊しつゝある證左となすものなり、所謂文明の暗黒面が捻出する惡魔の影なり」と解釋すべきものであると吾々に示して居る。又獨逸學界の一權威たるゾムバルトは主張して曰はく「サンヂカリズムの如き理論は獨り佛蘭西の如き高き文化を有する國に於てのみ發生し得べし。此の如き理論はたゞ *Illerleinte* の頭腦によつてのみ考へ出されることである……凡て平凡なる通俗主義、常識主義、素町人主義に反感を有する藝術家肌の感じを持つ人々の考へである。毛織物に對して絹を喜ぶ *raffinement* を解する人の理論である。サンヂカリズムを思想の體系として考へ出すと云ふことは社會理論家中 *bourgeois* の

業である」と。(大意)

※福田徳三著「經濟學研究」坤卷第一版第九〇九頁

※和田垣教授在職二十五年紀念經濟論叢所載河津選著「サンヂカリズム」第四七―八頁

※Werner Sombart, *Sozialismus und soziale Bewegung*, 6. A. S. 123-4.

此の如き方面からサンヂカリズムを批評し是非の論をなすと云ふことは今吾等が當面の問題でない。サンヂカリズムの論者茲處には主として<sup>①</sup>②が其の思想を行るにベルグソン哲學を自家藥籠中のものとして居るに對して、ベルグソン自身は獨逸の *Julius Goldstein* に對して與へたる手紙に於て其の兩者の必然的關係を否認して居ると云ふことは、既に我學界に於ても周知の事柄であるが、此の事實を如何に吾等は觀察すべきかと云ふことを問題として見たいのである。ベルグソン自身其の關係を否認するにも不拘、彼れの直覺主義哲學とサンヂカリズムの主張とを獨立したる二の現象として之を客觀的に觀察して、言葉の上よりせず、內的に實質的に兩者の間に何等の交渉をも認むることを得ざ

思想問題として見たるサンヂカリズム―ベルグソン哲學との交渉



るべきか。之を問題として見たいのである。

\*Julius Goldstein, Henri Bergson und Sozialwissenschaft. Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Juli-Heft 1910, S. 15-16.

此の問題を解釋するに當つて余は或時代に發生したる諸種の思想、運動乃至制度を以て之を統轄する一の有機的時代思想 (Zeitgeist) の派生なりとする如き歴史上の形而上學 (historische Metaphysik) に陥りたくない。余は反之謂はゞ經驗的の立場に於てベルグソン哲學とサンデカリズムの主張との實質上の交渉の有無を驗して見たいと思ふ。

此の兩者の關係は二つの方面から觀察し得ると思ふ。即ち第一、純論理的の立場から兩者の主張を共に一個の完成したる思想體系と見て、謂はゞ内部から見て兩者を比較する immanente Kritik を許す場合と、第二は之に對して兩者の主張を別々に離して謂はゞ外部から見て transzendente Kritik を許す場合とである。凡そベルグソン哲學の中心點は其の認識論に在らずして、實在問題に關する

ものなることは云ふ迄もない。カント以來認識論は主觀が客觀に dictate すると云ふ方面から徹底的の結論を導かれて、單純なる知覺も亦判斷の形式に aufzulösen せんとする論理主義に達したと云ふことは、反面に於て此の論理主義の實在問題に對する其の限界を明にしたものとも云ひ得る。ベルグソンが *durée réelle* を稱へ *élan vital* を道ふて *Revolution créatrice* を説くに直覺を擧げて、論理主義を排するに對して、吾々は先づ何故に此の如き純粹持續を先天的に創造的進化と見て破壊的退化と見ざるかと云ふ論理上の根本的非難を提出せざるを得ないが、假りに此の點は措いて問はずとするときは、兎も角ベルグソンは論理以前、理知以前の純粹經驗としての「或る物を捕捉するに於て、争ふことを許さざる」の境地を發見し得たりと云ふべきである。其の意義は進化と見るも、退化と見るも、靜止と見るも、運動と見るも、持續と見るも、斷絶と見るも我等の論理を以て争ふことを許さず、客觀的、普遍的妥當性を有する判定を下すを許さずとの謂である。従つて一方の退化と見るものを、他方の進化と見るに於て其の窮極の判定の標



準は之を有し得べからざる理である。何となれば論理の此の域内に入るを許さざればなり。茲に於てか恰も直覺主義と極端に反對の地位にある Pan-logism こそがヘーゲルの場合に於て見たる如く、左黨にも右黨にも自家の哲學なりとして援用せられたる如く、ベルグソン哲學も亦全く相反する主張を有する人々によりて自家の哲學なりと主張せらるゝに至つたと云ふことは止むを得ない結果と云はねばならぬ。\**Psychologismus* の前に善惡、眞偽、美醜の區別なく一切平等なるべきと同じく、直覺主義の前に於ては如何なる現象と雖もそれが *durée réelle* の中に起ると主張せらるゝに於ては凡て一切平等に *l'évolution créatrice* の一様相として看られざるべからざるものである。ベルグソン自身が之を否認するとは是認するとは問ふ所でない。\*今サンデカリズムが *l'état général* を *proletariat* の *mythe* なりとし、此の *mythe* によりて動かさるゝ場合に於て、何等理論的、因果的、聯想的の考察を許さざる境地に於て、自由意志の發展を完成する創造的自我を想ひ、自發的活動を擧げ、之によつてベルグソン哲學を援用し來つて破壊によつて

創造を説くに於て、余は不敏にしてベルグソン自身并に世の學者の如く其の不當なるを發見し得ない。否、余は若し茲にサンデカリズムに全く反對する論者あつて或る行動を以て其の論者等の *mythe* なりとし、之により起る各種の活動を以て全體的、流動的、過程なりとし、茲處に創造的自我の自由なる發展を説き、以てベルグソン哲學を援用し來るものに遭ふとも、余は此の如き前とは全く反對の場合に於ても、亦全く前者と同じく其の不當なる所以を發見し得ない。若し或る學者の云ふた如くに *l'état* がサンデカリストたることを脱して、ブルボン王黨の人となつたと云ふことが眞實であるならば、今や彼はカトリック教の或方面にも同情を有し得て、此の場合にも亦理論上ベルグソン哲學は其の王黨の哲學となり得べきである。ベルグソン哲學は此の反對の二つの場合を分つべき理論は其自ら有し得ない。豈管にサンデカリズムのみならんや、日比谷の焼打事件、新聞社の焼拂事件に對してベルグソン哲學を援用し來るものに會ふとしても、余は之を不當なりとする理論は發見し得ない。ベルグソン哲學の根本的



弱點は茲處に横はる。此の點あるが爲に如何なる論理的頭腦もベルグソン哲學に服する能はざらしむる。

\*Goldstein 前掲論文 S. 15 參照

\*\*特に Bergson, Essai sur les données immédiates de la conscience. 參照

茲に於てか問題は只サンデカリズムが *grève générale* を以て *mythe* なりとしてベルグソン哲學の援用を直ちに思はしむるに至つたことが是認せらるべきや否やと云ふ事丈である。即ちサンデカリズムとベルグソン哲學との交渉の論理的觀察より全く離れて、ベルグソン哲學の中心目的とする所と、サンデカリズムの主張の中心點とは互に吻合する處ありや否やと云ふことが問題である。

ベルグソン哲學の中心問題は既に見たる如く認識論にあるのではない。従つて合理主義、論理主義の限界を畫し、之によつて捕捉することを得ざる實在を直覺によつて體得し、茲に創造的進化を直觀の世界に發見せんとするに在るが、之に對してサンデカリズムは從來の *Parlamentarismus* に嫌らず *l'action directe* によ

*Parlamentarismus  
l'action directe*

りて之を破壊し、絶對的に生産者の社會の生成を見んとするのである。此の二の主張の對比に於て幾多の點に於て、類推を許すべき點あることを否むことを得ないと思ふ。乍併根本的に疑問とせらるべき而して難點と見做さるべき點は、サンデカリズムの直接行動による破壊が、其自身其丈で即ち生産者の文化の生成となると云ふに非ざる以上、舊社會の破壊と新社會の創造との間に實際には勿論論理上の連鎖がなければならぬ。而して其の連鎖の實質如何によつては直接行動を *mythe* なりとするこの主張は殆んど其の意義を失ふのである。例へば生産者の社會が出來上るとしても、其の生産の分量を決するものは消費者としての利益如何を顧みるによりてせらるるとする場合の如きときには、消費者の社會を破壊したる前きの直接行動の意義は全然消滅し終ると見らる如し。此の點は論理主義に非ずんば即ち反面に於て直ちに直覺主義によつて純粹持續の世界を直觀し得るとするベルグソン哲學との對比を考ふるに於て最も矛盾を感せしめらるゝ難點である。一に非ずんば他と云ふ場合に更に其の他よ

思想問題として見たるサンデカリズム—ベルグソン哲學との交渉



り第三のものを引き出さんとするサンデカリズムは單純に「一に非ずんば他を主張し得るベルグソンとは對比稍困難となるを禁じ得ない。即ち直接行動其自身に於て自由の境地を發見せんとするのか、或は之によつて更に生じ來るべき生産者の世界に於て創造的進化を見んとするのか、直接行動と生産者世界の創造との關係を如何に見るべきか」難點である。此の難點あるが爲にサンデカリズムの主張に於てベルグソン哲學體系中の論理主義の位置を占むべき從來の社會主義、改良主義、政黨主義も、サンデカリズムの直接行動の *mythe* に對して果して前者を分析的とし後者を綜合的とする對比を妥當として認容すべきやも亦從つて問題となるのである。而して此等凡ての直接行動による破壊其自らが其の目的たり、階級闘争の爲めの階級闘争と云ふことがサンデカリズムの窮極の目的となり、破壊すると云ふこと其の事が則ち創造すると云ふことであると云ふ論理が成立すれば兎も角、然らざる以上は、サンデカリズムの主張とベルグソン哲學とは永久に合せざる二つの并行線たるに止まらざるを得ない。

即ち兩者の關係は必然的たり得と云ふことを得ない。サンデカリズムが直接行動を手段として何物かを現出せんと主張するものなる以上は、即ち直接行動其自身がサンデカリズムの目的でない以上は、ベルグソン哲學の援用は *eccentric* たりと曰はざるを得ない。二つの圓の中心點は合して居ない。

※小泉信三稿ヤルドソシヤリズム(國家學會雜誌第三十一卷第六號第四十一頁)參照

此の如くして二者の對比を妥當なりと思はしむる點は遂に次の如きものに止まると云はねばならない。即ちベルグソン哲學の純粹持續に於ける發展の將來は、自由なる創造的自我により正に自然法則を超越したる豫想し得べからざるものを含むと云ふに對して、第一、サンデカリズムの直接行動による破壊が、或一定の目的を追ふて進む建設とは反對に、全く其の次の瞬間を豫想し得ずと云ふ消極的の吻合點を認め得ること、第二、破壊によりて生ずる生産者の文化なるものは、其の絶對的の意義に於ては創造的進化の趣きを傳へ得ると云ふこと、即ち生産者文化の建設は其の將來の幽昏なる點に於て、全部として考へらる



るのみであつて分析的なる事を許さず、理知的なることを許さずと云ふ意義に於てベルグソンの純粹持續に關する主張を想起せしむると云ふに過ぎない。

*grave général* の *mythe* を不可分の全體として茲にベルグソン哲學の直覺に對比せしめんとするは破壊を以て創造なりとするに於てのみ其の積極的の意義があることである。而かも破壊即創造と云ふことは我等の普通の觀念に於ては明に相反する二者を同一視せんとするものである。余は此の點に於て *mythe* の主張を充分に了解したるや否やを自ら疑はんとする程である。ソレルの主張に於てベルグソン哲學の援用を正當なりと思はしむる爲めには、直接行動による破壊即創造なりとの命題を主張するものなりと解釋しなければ論理が合はぬと余には思はるゝのである。又實際に於てソレルは只單純に *grave général* が實際上實行可能なるや否や、其の結果如何等を顧みるを許さぬとして、之を以て其の裡に決して先例を含むことを得ざる創造的行動の一なりと解釋して居る如く見ゆる節もなきに非ることは事實であるが、之では餘りに余には慊らず思

はれる。即ち總同盟罷工によりて、或社會の一團が國民生活上の一大決心をなす場合には、此の如き *mythe* によりて其の一團は正さに論議の範圍外に立ち、國民生活の其の瞬間は過去、將來を計量、想到するを云ふ空間的系列以外即ち因果律により羈束せられざる自由境に到達して、茲に區々の論理的言説を排して斷然たる實行をなすに至ると云ふ如き創造的自我發展の興趣を體得すると云ふのは、餘りに破壊の *mythe* に附するに生産の *mythe* の意義を以てすること甚しきに過ぐるものと云はねばならぬ。若夫第二の生産者文化の建設に對しベルグソンの創造的進化を思ふは其自身他と離して考へられたるときには、其の對比を至當とすることは何人も蓋し異論はあるまい。乍併此の點に於て、直接行動と離して生産者文化を考ふると云ふことは、サンデカリズムの理論に於ては殆んど其の意義を失ふことである。即ち破壊の *mythe* に制約せられずして生産者文化の創造を考ふことはサンデカリズムの理論としては無意義の事である。従つて破壊の *mythe* と生産者文化の創造との關係は、ベルグソン哲學の



援用の妥當如何を考ふるに於て最も困難なる問題たらざるを得ない。而して余の信する所に従へば吾等は否定的の態度に出でざるを得まいと思ふ。

此の如くして遂にサンヂカリズムとベルグソン哲學の主張との對比に於て、勿論其の文明史上の重要と意義とに於て、一方は消極的、破壞的、他方は積極的、建設的といふ如き重大なる差異が存すといふ事は前提として置いて、さて漠然ながら兩者に一致するものを求めしむれば、其の共通の基調に於て、飽くまで *fatal* *in* *deliberative* に進む吾等、近代の思想の傾向に對して其の結果としての收穫物が豫期に背反すること多きが爲めに、論理を以て説明することを得ざる人類思想の神秘的方面に於て其の救を求めんとする憧憬である。自由を想ひ個性の發展を念とするは近代思潮の特徴である。考ふると云ふことの代はりに、強烈なる現實感と意志の力とにより刺激せられて行動し働かんとするは近代生活の特殊性である、論ずるよりは行へと云ふのである。破壊せよ而して其の裡に創造は求められんとする思想は吾等はサンヂカリズムのみでなく、又或る意

味に於てはロダンにも求められ而してベルグソンに於ても求めらるゝ所である。只此の一般的思想の一部としてサンヂカリズムはベルグソンを有する國、ロダンを有する國に於て發生したるものとして見らるゝときには、或る一種の興味を吾等は感得することを非認し得ない。乍併此の如き傾向の考察によりて本問題を取扱ふといふことは、本講演の任とする所でないから茲處には深く立入ることを欲せぬが、只併し一概に「サンヂカリズムは佛國労働者の弱點の宣言である」(Brentano) と見るより以外に又此の如き方面よりの觀點あらざるなきかを問ふは蓋し無用の業ではあるまいと思ふ。ソレルのベルグソン哲學援用を以て單純なる「成金」の系圖調べに比する以外、何等かの意義はないだらうか。吾等は此の點に於て必ずしも更に同情ある解釋を下す餘地なしとより以外には云へないであらうか。

「思想問題として見たるサンヂカリズム、殊にベルグソン哲學との交渉」に就て吾等に解釋を迫るべき問題は決して一二には止まるまいと思ふ。余は本講演



に於て、夫等に關する諸君の深き研究を促す何等かの刺激を興へ得たならば、以て望外の幸福と思ふのである。

カント認識論と純理經濟學



大正四年十一月發行國民經濟雜誌  
第十九卷第五號所載同題文訂正

## 二 カント認識論と純理經濟學

(東京高等商業學校創立四十年紀念講演)

余が茲處に「カント認識論と純理經濟學」と題して論せんとする所は、此の各々及び兩者の關係を全般に互りて而して組織的に論せんとするのではない。カント認識論が其の以前の學說に對抗して起りたる所以を考ふるときは、純理經濟學の現狀に對して多大の暗示を與ふるものがある。此の點を究明せんが爲めに、先づ第一にカント認識論の特徴を研究し、第二に純理經濟學の現狀を観察し、第三に此の論述の結果兩者の關係を明かにして見たいと思ふに過ぎない。是本論の趣旨とする所である。

カントが從來の獨斷主義(Dogmatismus)及び經驗主義(Empirismus)に對して採りたる學說は、之を哲學上の批評主義(Kriticismus)と云ふ。其の之を批評主義と云



ふ所以は認識の起原と認識の價值とを峻別して、經驗主義の如く認識の起原を心理發生的 (psychogenetisch) に研究することが、やがて認識の價值を定むる所以なりと見る如きことに依つて其の兩者の關係を紊ることなく、一方には心理的方法によりて其の由來發生を究むべしとするも、他方には其の認識の價值を決定するに批判的態度を以てすべしと云ふに在る。之によりて他方には又初めて認識の可能其自身を検することなく之を以て當然の前提なりとしたる在來の獨斷主義と區別することを得るのである。此の哲學上の批評主義をカントは又自ら呼んで超越哲學 (Transzendentalphilosophie) 又は超越的觀念論 (der transzendentale Idealismus) と云ふ所以は認識の可能に必要な條件及び原理たる先天的要素なる主觀的形式を研究する上に於て超越的方法 (die transzendentale Methode) を稱揚するに依る。之によりて一方には形而上學の實在を有するものとしての物如 (Ding an sich) を排するの意に於て超越的實在論 (der transzendente Realismus) に對せしめ、他方に於て經驗的觀念論 (der empirische Idealismus) に向つては、此の論が外

Allymendinger's copy

界の存在は吾人の感性とは交渉する所なく、不可認識的に存在せざるべからずと暗黙裡に前提し、而かも吾人の感性は其の實在を確かならしむるに足らざるが故に、吾人の認識及び進んで一切萬有は唯だ吾が觀念のみなりとするを排斥して、カントは吾人の認識が先天的要素によりて主觀的に構成せられながら尙且客觀的なる普遍的妥當性 (Allgemeingültigkeit) を得來ると論ずるのである。經驗主義の説明によつては假令認識の起原は説くことが出來るとしても、認識の價值を判斷することが出來ず、又獨斷主義によりては認識の可能を前提してかゝつて居るから認識の價值は初めから丸で問題にならぬと云ふ位確實とせられて居るけれども、經驗主義の論理によつて獨斷主義は全く成立することを得ない迄に粉碎せられてしまつた。茲に於て經驗主義を或る程度迄考への中に入れて認識の價值を検し、認識の可能を究めんとしたのがカントの批評主義であり、其の之を説明するに拉し來つた先天的要素が超越的にして且つ主觀的なるの故を以て其の説を超越的觀念論と呼ぶのである。而して此の關係に於て



は尙説明すべき意義に於てカント哲學の根本問題は、如何にして先天的綜合判斷は可能なりや、(Wie sind synthetische Urteile a priori möglich?)の一間に集中して居る。今其の理を次第に明かにして見よう。

凡そ認識に於て其の對象につきて何物かを説き示すものは判斷の形式に於てする。而して判斷の形式の區別として茲に必要なるは分析判斷 (analytische Urteile)と綜合判斷 (synthetische Urteile)とである。分析判斷は其の主辭の中に明白ならずとも既に含まれたることを賓辭に於て言ひ表はすこと、例へば「總ての物體は延長を有す」(Alle Körper sind ausgedehnt.)と云ふが如きものであるが、綜合判斷は或る物體は重し (Einige Körper sind schwer.)と云ふが如く、物體なる一般概念に於て考へられざる或るものを賓辭に表はして吾人の認識を擴充するものである。(Kant, Prolegomena, 1783, S. 25. 參照) 此のカントの分析及び綜合と云ふ判斷の區別は絶對的のものに非ずとは多くの認識論者の争ふ所であるが、大體に於て分析判斷は純粹の概念命題 (reine Begriffssätze) 綜合判斷は直觀判斷 (Anschauungsurteile)

と云ふ意味に於て立せられ得べきものなること誠にリールの云ふが如きものがある。(Riehl, Der philosophische Kritizismus, Bd. I, 2. A. Leipzig, 1908, S. 421. 參照) 此の如く綜合判斷は直觀判斷であつて、分析判斷が其の性質上先天的なるに反して、唯直觀によつてのみ可能なるが故に、經驗を待つて初めて成立する、従つて後天的なるが普通である。即ち綜合判斷は由來後天的、特殊的、偶然的であつて、分析判斷の其の性質上先天的、一般的、必然的なるに對立すべきであるが、外界に對する知識及び認識が確實なる爲めには其の擴充に於て綜合的なることを要すると同時に其の妥當性の點に於て一般的、必然的なることを要する、即ち synthetische Urteileにして且つ a priori なることを要する。之は可能なりやと云ふことに於て批評哲學は最も困難なる問題に遭遇したのである。此の先天的綜合判斷は可能なりやと云ふ問を發する迄の思想發展は、實にカントの批判哲學を完成する準備の全體を語るものであつて、此の一大難問の解明を發足點として、如何に彼れの哲學體系が建設せられたかは、彼れの批評期以後の事業の全體が之



を示すものである。而して此の難問の提起はヒューム(Hume)の徹底したる懷疑主義(Skeptizismus)の立説によつて一切の認識が根柢から破壊せらるゝことを見たるより來る。即ちカントの批評主義は經驗主義又は心理主義(Psychologismus)の破壊に於て其の根本的の意義を表はして居る。

ロック(Locke)は生得觀念(*innate ideas*)がデカルト(Desartes)に依つて稱道せられたるものを排して、總て觀念は經驗より來ると云ふ有名なる *tabula rasa* の論を説いたが、然し其の行論に於て殊に認識の價値を検する條下に於ては、或は其の觀念が客觀の事物を原因として起り、其の觀念が之に對應するや否やに依つて所謂 *simple and complex ideas* の眞、非眞、妥當、不妥當(*real, unreal, adequate, inadequate*)なるやを見んとし、或はデカルトと共に因果律を何等の前提なしに直覺的に明瞭なるものと見たるが如き、經驗論者としては幾多の徹底せざる論旨を包含して居るが、此の經驗論を最も徹底したる結果に導き來つたのはヒュームの心理主義的懷疑主義である。②ヒュームは總ての觀念を印象に歸せしめ、此の印象の

再生したるものが觀念であると説き、而して其の觀念の結合は、一に類同聯想(*association by resemblance*)、二に接近聯想(*association by contiguity*)、三に因果聯想(*association by causality*)に依るものとした。此の中因果聯想は畢竟接近聯想の一種として觀察せらるゝことを得るから觀念の聯合は畢竟第一、第二の二つの聯想に依るものとせられた。而して總ての知識は、一は觀念相互の關係を論ずるに類同聯想によりて其の一致、不一致を見る數學と、他は經驗的事實を接近聯想により時間的空間的に連續し共存する關係に於て見る所の自然界及び人類に關する學問との二がある。後者の中には既經驗の事實より未経験の事實を推論せんとする因果聯想による知識の大部分が其の内に含まれて居る。而して前者の數學的知識は分析判斷であるから其の反對を考ふることは不可能なるが故に論證的眞理を含むけれども、後者の事實上の眞理は綜合判斷の結果なるが故に其の反對を考ふることは少しも矛盾を含まない、従つて此の點に於ける論證的知識は不可能である。就中事物の生起に關する推論の基く所の因果聯想は、



或一現象の後には必ず常に他現象が續起すると云ふ印象を受けて、唯聯想的に習慣的に動かすべからざる信念となるに至つたに過ぎない。②其の二現象の背後に又は以上に因果の必然的關係を経験せんとすることは吾人の認識の限界を超えたるものである。従つて吾人の經驗の原因基礎としてデールカルト及びロツクすらも因果律を根據として本體及び神の存在を論證し得たりとしたりしものも、ヒュームに至つては因果律の破壊によつて事實上の知識を論證的に確實ならしめんとする形而上學は全く破られたることゝなつたのである。加之一切萬有の學的知識、自然法則も因果聯想を以て其の推論の基礎とするが故に、自然科学の全般も亦論證的確實性を得る能はずと云ふ意義に於て、唯だ吾々の信念の結果に過ぎないものとなり終るのである。是ヒュームの近世哲學史上甚だ大なる影響を及ぼした因果律批評の結果である。

此の徹底したるヒュームの懷疑主義或は實證主義 (Positivismus) は、經驗主義に於て認識の起原を心理發生的に究明する所以が、やがて認識の價值を決する所

以であるとする心理主義の當然の歸結である。

茲に於てカントが如何にして先天的綜合判斷は可能なりやとの設問をなした意義、其の此の如き設問をなすに至つた學問上の經過苦心が明瞭になつたと思ふ。即ち自然科学の一切の知識が經驗的に綜合判斷に依つて擴充せらるゝことを要すること勿論であるが、此の際若し此の如き一切の學的知識が其の妥當性に於てヒュームの稱ふる如く後天的、主觀的、特殊的、偶然的であるならば、其は全く知識たるの價值あることを得ないと云ふ當然の結論を救ふの道は、唯だ一に懸りて此の如き綜合判斷より成る學的知識が、其の妥當性に於ては先天的、客觀的、普遍的、必然的なることを得るや否やを檢するに在りと見たのである。③換言すればカントは世に綜合判斷にして且つ先天的なるものあり得とせば、之に依つて初めて一切の學的知識は其の成立の論理的根據を得べく、以てヒュームの懷疑主義に對し得べしとの點を觀取し得たのである。彼がヒュームの徹底したる議論によつて其の "den dogmatischen Schlusser" を unterbreche せられた

*Profound meditation*



と云ふことは即ち獨斷主義の主張とは全く反對に經驗主義によれば一切の自然科學が確實なる知識とは云ふことを得ずして、實用的には不足なしとは云ふものゝ畢竟一箇の主觀的信念に過ぎないと云ふ論理の峻嚴に愕然として驚異の眼を見張つた結果である。カントが其の批評主義に於て上記の一間の解明より發足して茲に初めて自然科學が論理的の Begründung を得たと云ふのはヒュームの經驗主義に對抗して認識の先天的條件及び原理を究明したるに依る。之に依りて初めて一切の學的知識は綜合判斷の結果にして而かも普遍的妥當性を得る所以が明かにせらるゝを得たのである。他方に彼が認識論に於て救ふことを得ざりし超越的形而上學は信念の界に於て之を迎へ、Ich muss (also) das Wissen annehmen, um zum Glauben Platz zu bekommen. " Ich によつて神自由不滅 (Gott, Freiheit, Unsterblichkeit) の三に對しては信念を説いてヒュームに對つた。

吾等が茲に當面の問題とする所は認識論に於てロック、ヒューム等の心理主義を破つて批評主義を主張したるカントの態度に在る。カントはヒュームの

心理主義によつては認識の普遍的妥當性を與ふべき所以なきことを正當に理解し、之あるを得せしむるものは唯だ認識の形式が先天的超越的而かも内在的にして素材の後天的經驗的なるものに對する所以を説明する以外にないことを悟つた。其の結果は彼自らが其の哲學上の態度を譬へてコペルニクス天文學上に於けるものに似たりと云つた様に、私かに認識論上の革命家を以て任じたのである。吾々の認識が對象に向つて朝するものと見るときには其の對象を超えて先天的に概念に依つて擴充せんとする總ての試みは無効に歸せざるを得ない。然れども一たび之と反對に却つて認識の對象が吾人の認識に向つて朝するとすれば對象の認識の求められたる可能性と、より善く先天的に適合することを得て、所謂「形而上學」の問題を更に善く説明することを得ざるかとの疑問を起して、直觀形式及び悟性概念の先天性を説き、遂に吾々の一般經驗を可能ならしむる條件は同時に經驗の對象を可能ならしむる條件であり、此くして先天的綜合判斷に於て客觀的妥當性を有することを見得べしとの大原則に



達し得たのである。故にカントに従へば經驗は吾等に與へらるゝものに非ずして、吾等によつて造られねばならず従つて吾人が依つて以て一般經驗を造るべき法則は對象の經驗につきて妥當であるから、又經驗の對象其自身につきて妥當でなければならぬ。此の理を究むるときに初めてガリレイに依つて稱道せられたる思想の完成として見らるべきカントの次の有名なる一句は了解せらるゝのである。即ち「Natur ist das Daseyn der Dinge, so fern es nach allgemeinen Gesetzen bestimmt ist.」(Prolegomena. 1. Aufl. 1783. S. 71.)と。此くして吾等と外界とは認識論上全く位置を轉倒せしめられたること誠にコペルニクスの地動説に髣髴たるものがある。此の論立せられて初めて物如界は認識論上不可知の界として認識の限界を劃せられたると同時に、吾人の事物に關する認識は確實性を得來り普遍的に妥當なるを得て、茲に初めて心理主義は假令其の後心理學の勃興と共に屢々其の稱道を見ると雖も、認識論上成立の餘地はなく、之によつては認識の價値自身は決定せられ得ぬと云ふ理が明にせられた。即ち心理主義によつ

ては認識の起原は如何様にも精細に究めらるゝことが出来るけれども、此の如く解釋せられたる認識は畢竟するに其の妥當性に關して特殊的、偶然的であつて、普遍的、必然的なることを得ない。之あるは唯だ形式主義によつて認識の天的條件及び原理が決定せられたる場合に於てのみ經驗の可能の條件が經驗の對象の可能の條件と見られ得るによつて出来ることである。之によつて天地間の萬象が經驗の對象として可能なるにより經驗自身が亦可能となつて、茲に初めて認識の價値が決定せらるゝのである。心理主義によつて説かれ得る認識の起原其自身によつては此の如き認識の起原あらしむる所以は之を説くことを得ぬ。此の認識を可能ならしむる所以の根本を離れては認識の起原發生に關する經過は嚴正に言へば混沌たる經驗素材の雜列に過ぎぬ。之を既に一の秩序ある認識發生の經過と見ることを得る爲めには、之を導く一箇の先天的形式なかるべからず。此の先天的形式を定めたものがカントの超越哲學である。茲に Sollen の界を見たるが故に認識の妥當性が普遍的必然的なるを得



ると同時に、認識の限界を決定することを得るのである。心理主義に於ては總てのものが自然的必然的 (naturnotwendig) に一様に妥當なれども、批評主義に於ては自然的必然なるものに於て初めて眞偽、善惡、美醜が規範 (Norm) によりて分たれ、其の價値が分別せらるゝから、茲に初めて規範に照合せられて價値づけられたるものゝ普遍的妥當性が主張せらるゝのである。即ち普遍的妥當性とは批評主義に於ては「事實上に承認せらるゝこと」 (Das tatsächliche Anerkanntwerden) と云ふ意義にはあらずして「承認せらるべきこと」 (Das Anerkanntwerden sollen) と云ふ意義に於て解せらるゝから、事實上如何程迄に承認せらるゝやと云ふとは問題の核心に觸れて居ない。其の代りに普遍的價値が存在せざるべからずと云ふことに其の論の根基を置いて居るのである。此の意義に於て心理主義と明かに分たるゝので、「一方に Sollen の界を見るが故に、他方に又吾人の經驗の條件は經驗の對象の可能性に對する條件なりとの論が出て來るのである。然らずんば外界の可能は吾人の認識と何等の交渉を有することを得ず、吾人の認識の限界は

初めより決定せらるゝか、又は終りまで決定せらるゝことを得ないと云ふ結果に至らねばならぬ。心理主義によりては總ての經驗は自然的必然性に支配せられて何等價値の差を發見し得なくなる。價値の無い所に妥當性を云々するは畢竟無意義である。而して妥當性に關係するとなくして認識を云々するは全く精神なき形骸を論ずるものに過ぎない。心理主義によつて究めらるゝ心理上の經過は認識の妥當性に對する根基又は其の立證の根據たるを得ない。唯さりとして忘れてはならぬことは其の認識の妥當を検する唯一の手段及び對象は此の如き心理上の經過以外にはないと云ふことである。批評主義の中心點は規範たる形式が認識素材に對して此の如き不即不離の關係を有すと云ふことに存在する。是以外にはない。即ちカントの認識論は一言以て之を覆へば、認識に關して *questio facti* を見たるにあらずして *questio juris* を檢したるに在る。茲にカント哲學の意義と重要とがある。

余はカントの認識論の根本原理殊に心理主義に對する態度を思ふ毎に、未だ



曾て純理經濟學の概念構成の根本主義に想ひ到らざることなきを得ない。是余の茲處に問題となさんと欲する所である。

## 二

我校創立四十年記念祝典に際して特に敬意を拂ふて純理經濟學説の代表として我校出身の福田博士と津村博士との所説をとつて之を検することとする。今兩博士の其の經濟學の概念構成に於て採る所の主義は何であるかを見ると、兩博士の論述の傾向、説明の體裁等に於て種々の異なる點を發見するけれども、其の概念構成の主義に於ては共に其の揆を一にして居る。是當今の純理經濟學に於て殆んど例外なく見らるゝ論理上の主義であつて、此の點に於ては兩博士の著書の所説を採り來つて、安むじて當今の純理經濟學一般の概念構成の主義を示すものとして檢し得るのである。

先づ福田博士の説を検するに、其の著國民經濟原論に於て「經濟學の研究の對象は國民經濟である」(三頁)とし、而して此の國民經濟を形成して居る最根本的の

概念は經濟行爲竝に經濟の二つである(四頁)此の二つの概念を説明するに其の出發點は種々學者によつて異なるが畢竟經濟の概念の成立點であり到達點であるべきものは慾望である、經濟行爲と云ふ概念は之から出立して歸納的に逆進して始めて解答し得るのである(五六―七頁)と云ふて「慾望」の説明に經濟學概念構成の出發點を置いて居る。此の點を特に注意して貰ひたい。博士は進むで説明して曰く「此の慾望を充たさんが爲めには自己を取巻いて居る所の外界の力を藉らなければならぬ」(八頁)此の如き外界のものであつて人類が一定の慾望を充すに適すと思惟するところの特定物を稱して財と言ふのである(八頁)既に外界の財といふことを以て表はしてある通りに經濟上では内界の財は之を財として算へ入れないのを以て適當とする(一〇頁)従つて人の知識才能の如きものは勿論、權利關係動勞の如きものは皆財ではない。此の「人類が自分の一定の慾望を充たすに足ると思惟する財に對して起こす一種の行動を指して經濟行爲」(一一頁)なりと呼ぶ。然しながら「自由なる天然の賜物を得る如きは經濟行



爲ではないと云ふ所以は、必ずしも其の理由は財の稀少性と云ふことには歸せ  
ないで「經濟行爲を惹起すべき所の財と云ふのは人類が之を占有することを欲し  
ない所の物は數へ入れない」(一四頁)又物の性質上占有することの出来ないもの  
は經濟上財とはならない(一五頁)然しながら此の如く占有せらるべきもの又は  
占有せられて居るところの財に對する所の行動が直ちに悉く經濟行爲かとい  
ふに又そうではない(一五頁)唯だ「經濟行爲とは慾望を充すに足ると人類が考へ  
てさうしてそれが占有の目的物となることが出来るもの、人が之を占有するこ  
とを欲するもの又は既に目的物となつて居るところの外界の財であつて之を  
慾望充足の用に供する爲めには先づ占有することを要するものを獲得するを  
云ふのである」(一五—一六頁)之が今日の法律制度、經濟組織の下にあつては、給付  
に對する反對給付の關係を有して居る所の行爲を稱するのである(一五頁)共に有價的で  
如き經濟財の獲得占有の方法は生産と交換の二つである(二五頁)共に有價的で  
ある。然らば經濟とは何かと云ふと、福田博士は主張して曰く「經濟とは一定の

時間に向つて慾望を充足するを目的として之を保障するが爲めの持續的竝に  
規則的の秩序を言ふのである(三七頁)と。之を經濟行爲との關係に於て見ると  
きは全體と部分との關係をなして居る(三八頁)此の如く考へられたる經濟には  
色々の種類があるが「國民經濟とは一國民の各種經濟行爲の全體竝に各般の共  
同經濟並に特殊經濟の總括的組織である」(五六頁)而して此の如き國民經濟が經  
濟學の對象である(三頁)と云ふ。

此の經濟學の概念構成は又同博士の「經濟學教科書(訂正再版)に於ても見得る  
所である。唯其の出發點を慾望とする代りに更に心理學的考察を進めて衝動  
を拉し來り「諸種の衝動は絶えず吾人を促して生活の爲めに活動せしめ」(八—九  
頁)其の活動の目的を意識するときは之を慾望と云ふ(九頁)と説明して居る。之  
から慾望の對象を見吾人の生活に於て慾望の對象に對し費用と利用とを比較  
して下す判斷(二六頁)を價值と云ひ吾人の生活上「一々價値の判斷を以て行爲と  
對象とを品評し以て生存を完ふし文明の發達を期するもの」(二七—一八頁)を名



づけて價值生活と云ふが、經濟とは要するに吾人と外界の物竝力及び勤勞との關係上より判斷を下す價值生活を(一九頁)云ふのである。然るに此の如き慾望の對象が無限自由に存する場合には經濟なる價值生活は起らず(二二頁)故に經濟は費用を提供して利用を得る場合の價值生活を云ふ(二二頁)のである。「吾人の行爲の中斯く費用を提供して利用を得るを指して經濟行爲と云ひ、此の行爲の目的たる財を經濟財と云ひ、此經濟財に就て下す判斷の價值を稱して經濟價值と云ひ、經濟價值の生活を稱して經濟生活と云ふ(二二頁)總て是等の場合に於ける經濟なる語は有價的と云ふに同じ。此の如く解せられたる「經濟生活及經濟行爲の目的を同ふして吾人の構成する組織を名けて經濟組織と云ふ(二六頁)のであるが、其の經濟組織の最も發達したるもの之を國民經濟とし(三二頁)此の國民經濟を研究する學を經濟學と云ふ(五〇頁)と。

以上二書に表はれたる福田博士の經濟學概念構成の主義は何であるかは津村博士の採りたる主義と共通のものあるを以て後に一括して論ずることとし

先づ津村博士の所説を聴かん。

津村博士は其の「國民經濟學原論」上卷(訂正増補)の卷頭に其の概念構成の經過を最も明に示して居る。同博士は曰く「國民經濟學の何たるを知らんと欲せば須らく先づ國民經濟の何たるを知らざるべからず。而して國民經濟の何たるを知らんと欲せば須らく先づ國民經濟を構成する所の根本的要素たる經濟經濟單位、並に經濟組織の何たるかを知らざるべからず。又經濟、經濟單位、經濟組織の何たるかを知らんと欲せば須らく先づ經濟行爲の何たるかを知らざるべからず。而して經濟行爲とは人類生活上の諸行爲の一種なり、されば人類生活上の一般行爲の動機となるものは又經濟行爲の動機たるべし。然らば人類生活上の一般の行爲の動機となるものは何ぞや、曰はく人類の慾望即ち是なり。之を以て吾人は國民經濟學研究の第一著手として先づ人類の慾望より始めんとす(一一二頁)と。之により國民經濟學概念構成の出發點として福田博士の初めの著書と同じく慾望より始めて上記の記述を逆行して國民經濟學の對象た



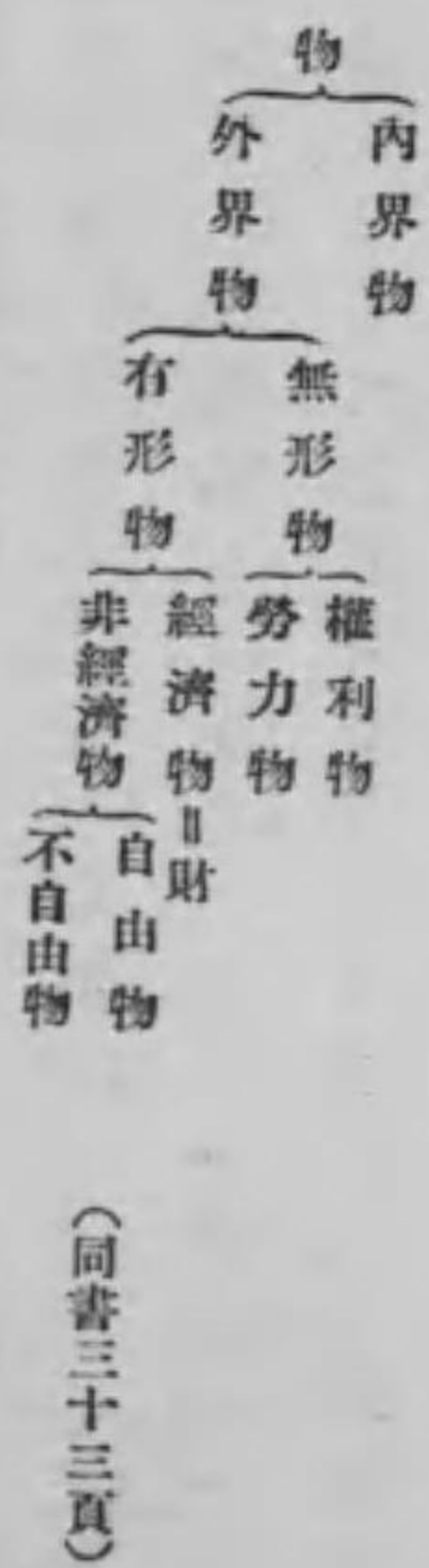
る國民經濟の概念を構成して居る。即ち慾望の内經濟學に重要なものは物質的慾望であるが慾望全般に互りて之を充足するに適するものは一般に之を「物」と云ひ(一九頁)殊に物質的即ち經濟慾望を誘發すべく又充足し得べしと認められたる物を經濟上財と云ひ(三四頁)此の如き經濟財を得て經濟的慾望を充足せんとする行爲を經濟行爲と云ふのである(四三頁)而して此の如く解せられたる經濟行爲の幾多のものが一定の秩序の下に繼續せられて一體をなすとき吾人之を稱して經濟と云ふ(五一頁)かゝる經濟の實際に存在するものには其の種類數多ありと雖も孰れも經濟主體と經濟行爲者との二分子より成るものなるが斯かる各種の經濟が分業と交換とにより有無相通じ過不足相補ひ相依り相助けて一團をなすとき吾人之を稱して經濟組織と名く(五四頁)るのである。此の如き經濟組織にも數種あるが之が統一せる一國民の基礎の上に分業と交換とにより結合して一大經濟組織をなすとき之を國民經濟と名く(五六頁)るのであり、此の國民經濟に關する秩序的知識の總體(六一頁)を稱して經濟學又は國民經濟學と云ふのである。

以上が茲處に選むだ純理經濟學の二代表者の所説であつて多少其の説明の精粗方法及び力説する點に於て差はありとしても概念構成の主義及び經過に於ては其の揆を一にして居る。而して是管に兩博士に限らない、殆んど總ての學者が其の所説に於て一致して居る所であるが、經濟學の出發點を慾望に求め、之より其の對象たる物一般を得、其の内より經濟學上の財を導き、之に關聯せしめて經濟行爲の概念を定め、進むで之より經濟の意義を決し、更に經濟組織の完成したるものとして國民經濟を拉し來りて吾が經濟學の對象を定め得べしとして居る。

余は此の概念構成の主義及び經過に就きて多年疑問を抱いて居る。而して余は此の如き主義は正さに純理經濟學上の心理主義と呼べるべきものであつて認識論上の心理主義の斥けられざるべからざると同様に、我が經濟學上に於ても排せられざるべからざるものと思ふ。



論者が最初に經濟學の出發點として人類に共通なる幾多の慾望が存在するとして舉示するもの、内について、特にある一種の慾望を指して經濟的慾望と云ひ、慾望充足の對象中より特にある一種の物を指して經濟財と稱して之に適合せざるものは經濟學の對象たらずと云ふこと假りに津村博士によりて作られたる物の表によつて見ると、



物全般から先づ内界物を去り、之に對する外界物より權利物及び勞力物を含む無形物を去り、更に有形物中よりは自由物及び不自由物たる非經濟物を去りて後に殘留する財のみを經濟物と云ふて居る。而して經濟行爲を定むるに當つても論者は又人類行爲中の或特殊の行爲のみを以て經濟行爲なりとし、而かも「經濟財を得て經濟的慾望を充足せん」との行爲悉く經濟行爲に非ず(津村著書四

三頁)或は此の如き行爲は有價的なるべしと云ふか(福田)或は經濟主義によることを要すとか(津村)夫々何等かの制限を設けて居る。

余は此の如き概念構成の經過に對して根本的の一間を發したく思ふのは、此の如く慾望でも、財でも、經濟行爲でも、其の概念を定むるに當つて、或種のを排し他の種のを採り來りて之が經濟學上の正當なる概念なりと云ふ決定を與へ得る所以の標準は何處にあるかと云ふとである。幾多の物の中にあつて一を採りて他を排するには必ず其の一を採りて他を排する所以の根本原理がなければならぬ。純理經濟學の概念構成上に於て論者をして「經濟的なりと思はしむるものは抑々何か。吾人が混沌たる經驗素材に對立するときに、一を經濟的なりとし、他を非經濟的なりとし、其の經驗素材を兩者に分ち得る爲めには、吾人の認識の原理として存在する或ものなくしては其の概念構成は任意たるを免れない。津村博士は、非物質的慾望は美學、哲學、心理學、倫理學、宗教學等の直接研究すべき範圍にして獨り物質的慾望こそ經濟學の直接研究すべき對象な



りとす(一七頁)と突然に何等の前提なしに決定して居らるゝが、吾等は「何故に」と云ふ問を發し得ないか。此の問に對して答ふべき原理を有することなくんば純理經濟學の概念構成は、一箇の偉大なる乍併畢竟するに空中の樓閣たるを免れない。如何に精細に慾望の依つて起る所以の衝動を説明し、如何に細微に互りて慾望の種類を解説し、之より經濟財の性質、經濟行爲の起る所以を説明しても、此の如き心理主義的概念構成其自身によりては其の心理主義的説明を可能ならしむる其の根本は説明し得ない。一を棄て、他を探る所以は、其の一を棄て、他を探る事實其自身によりては説明し得られぬ。而して其の一を棄てて他を探る所以を悟ることなくしては、其の一を棄て、他を探る選擇が正しきや否や、即ち現今の純理經濟學が有する慾望、財、經濟行爲等の概念が正しきや否やを確め、又は其等が正しとの結論は到底得らるべきではない、即ち *quaestio juris* に觸るゝことなくして *quaestio facti* に往來して居つた從來の純理經濟學は認識論上心理主義の誤まりを其の儘に繰返しつゝ來つた。經濟學の對象たる經濟

經濟行爲の概念構成に其の精細の度を加ふることは歳を追ふて益々甚しいが、其の細微に入る經過其自らが正しとの結論は其の經過自身よりは出て來ない。沼に陥つた支那人を引づり上げる爲めに、其の編み上げた髪の毛を引つ張るものは其の支那人自身たるを得ない。汽車に乗つて居りながら、其の窓の框又は何處か車體の一部を、滿身の力を込めて前方に押ししても自分の乗つて居る車は動かし得ない。如何に近世科學の結果を綜合し、慾望の種類を叙述し、其の依つて起る衝動の性質種類を説明しても、何が經濟的なるやは其の精細なる説明よりは生じて來ない。此の如く經濟學概念構成の大原則に缺くる所あるを自覺し得ず、且余の此の論難に對して辯駁することを得ざる現今の純理經濟學が有する諸概念を直ちに正しとすべしとする理由は余は悟り得ない。純理經濟學が心理主義に従ふ間は其の有する諸概念が正しとの立論をなすの權利は論理上ない、之を確むる根據なければなり。即ち此の意義に於ては從來の經濟學は何故に、或る種類の慾望を以て經濟的慾望となすかは説明し得ない。或る種類



の慾望を經濟的慾望と云ふは其が經濟的慾望であるからであると云ふより以外には理由はない。然らば其の他の慾望を經濟的慾望に非ずとするも、其が經濟的慾望に非ざればなりと云ふより以外の根據はあり得ない。現今の純理經濟學は其の概念構成に於て此の如き單純なる前提なき獨斷論をなして居るのである。是偏へに純理經濟學が心理主義を奉ずる結果である。

## 三

此の純理經濟學上の心理主義を斥くる爲めには、其の概念構成に於て一を以て經濟學に對して本質的なりとして之を採り、他を然らずとして之を棄つる所以の根本原理たる嚮導觀念 (die leitende Idee) を研擧するを要す。即ち何が經濟學を學として可能ならしむる所以の斯學に特有なる概念の構成に於ける嚮導觀念なりやを見ることを要す。此の如き嚮導觀念は概念構成を導き、之をして經濟學上可能ならしむるものなるが故に、其の概念構成其自身より發生し來るものではない。カント哲學上に解せられたる意義に於て之を換言すれば、此の

如き觀念は概念構成に對して先天的ならざるべからず、即ち純理經濟學の心理主義を破る者は其の概念構成の先天的要素を指示して之を立證する超越哲學の面影を語る者でなければならぬ。純理經濟學が一後天的經驗的科學として先天的要素を缺くとを許さずとの理は諸方面より觀察し得るが、後出經濟學認識論の若干問題參照茲には一經驗科學の範圍内に於て其の概念全部の構成に當り、一を其の概念に本質的なりとし、他を非本質的なりとするには、其の學全體を貫通して其の概念構成の歸趣を示す一嚮導觀念あるとを要するとの意に於て、其の學の概念構成に先天的要素を要すと云ふのである。其の經濟學の對象たる人類文化生活の一としての經濟生活を可能ならしめ、兼て其の歸趣を示す所以の經濟的文化價値の如き先天的要素を究明するは經驗的科學たる經濟學を超えて經濟哲學の問題とする所であつて、茲處には此の點には觸れぬ。唯、經驗的科學たる經濟學の範圍内にあつて概念構成上の先天的要素として、何が斯學概念構成の嚮導觀念なりやを問ふを以て足りる。此の觀念明かになつて



初めて經濟學の概念は其の出發點と歸着點とを示さるべきである。換言すれば純理經濟學の概念構成に於ける最始の而して最終の問題は其の之を可能ならしむる所以の嚮導觀念は何なりやを究むるに在る。而して是從來の純理經濟學が全く觸るゝことを忘れた斯學最重要の問題である。否、從來の純理經濟學は此の如き嚮導觀念を明かに意識に上ぼしては見なかつたが、其の概念構成の經過を論理的に考ふれば、從來の經濟學と雖も、此の如き嚮導觀念に似而非なるものなしには一の概念も得られないことは之を見得る。此の點を檢するときは一層心理主義の保つべからざる所以が發見せらるゝ。其の故何ぞ。

慾望に出發して經濟の概念を形成する間に於て、一を採つて其の概念に本質的なりとし、他を然らずとし、取捨をなして其の目的に進む經過を今論理的に考へて見ると、抑々此の如き取捨を可能ならしむる爲めには慾望を説いて其の或る種類を以て經濟的慾望なりとし、他を然らずとする其の出發點に於て、既に此の如き經過によりて得らるべき結果即ち經濟の概念を前提して居るものであ

る。此の場合經濟の概念を前定して居ればこそ暗々裡に此の概念に照合して、例へば慾望とか行爲とかの概念の中一を本質的なりとして之を採り、此くして此の經濟なる概念の構成に資し、他の者は之に反して非本質的なりとして之を棄つるといふ取捨選擇が出来得るのである。即ち此の經濟と云ふ概念に適應する様に色々の概念を作り上げて而して其の結果として最終に經濟の概念を定むるのである。若し此の際經濟の概念を前提として居るものでないとすれば概念構成素材たる幾多の慾望中一を經濟的慾望として之を採り、幾多の慾望充足の對象中特に一を經濟的財として見、幾多人類行爲中特に或一種のみを經濟行爲なりとすることは別に他に何等かの根據を有さねばならぬ。而して之を發見するとは現今の純理經濟學に於ては全然不可能である。既に此の如く一方には概念構成に於て將來得んとする經濟の概念を前定して居り、而して他方には此の經濟の概念を構成する爲めに慾望等の概念中より或る一種を採りて之を經濟的と名づけ、此の如き經濟的慾望、財、行爲より經濟の概念を得べしと



する純理經濟學上心理主義の論理的構造は從來の純理經濟學が自ら其の意識に上ぼさざりし問題である。即ち斯學に於ける概念構成の嚮導觀念に似而非なるものは其の自意識には明確ならざりしも、論理的に嚴正に檢すれば即ち其の概念構成經過の到達點たる「經濟」と云ふ概念である。故に此の如く前提とせられたる經濟の概念が若し誤てるものならば其の是れに達する概念構成の全經過は全く誤まつたものとならなければならぬ。而かも其の概念が正しきや否やを定むべき標準は、其の概念構成の經過自身に於ては内在的に存在することを得ない。抑々心理主義に於て何等の前提なしに單純なる概念より複雑なる概念を順次に心理發生的に築き上げ得べしと思ふは一箇の論理的錯誤に陥つたものであつて、此の如き心理發生的經過あらしむるには必ず何等かの意義に於ける一箇の前提あることを要し、而かも此の前提が正しきや否やは其の心理發生的經過自身によつては之を確むることを得ない。今純理經濟學上の心理主義に於ても、此の理に依つて心理發生的の經過を可能ならしむる爲めには、

其の前提として經濟の概念を要し、而かも是から出發して種々の經過を通じて初めて得らるゝものが又此の經濟の概念であるが、之が正しきを得るや否やは到底自ら之を檢することを得ぬ。經過其自身に依つては其の經過を是なりとも非なりとも立證することを得ない。即ち心理主義によつては何等の價值判斷をもなすことを得べきではない。是從來の純理經濟學が其の概念構成に於て將さに得べきものを前提として居る一箇の循環論法の誤まりに陥り、兼ねて概念構成上何故一を本質的なりとし他を然らずとするかを示すを得ずして獨斷論を稱道しつゝあることを示す所以である。

此の心理主義、經驗主義を破らんとするには純理經濟學の概念構成上の嚮導觀念としての先天的要素を宣明し、兼ねて此の要素に係りて經濟學上の總ての概念が從來の如く實在論的でなく觀念論的に構成せらるべしとするに在る。今茲に在來の經濟學が概念を構成するに實在論的であつたと云ふ意は、例へば經濟財の概念を得る場合に總ての慾望充足の對象を物と云ひ此の内より内



界物を去り外界物のみを残し、之より無形物を去つて有形物を採り、更に進むで非經濟物を除いて經濟物を採ると云ふが、此の場合に經濟物とは必ず慾望充足の對象の或る一種のものとしてしまつて、經濟物と云ふ概念を吾人の認識對象の「實在」に結び付けるに至るから、經濟物と非經濟物とが概念上流通を許さぬ確固不動の區分となつてしまひ、所謂經濟財は始めから終りまで慾望充足對象中の或る一定の範疇を形成するが如く説かるゝのである。尤も昨日の自由天然の賜物も今日は經濟財となることありと説く様に、其の間に概念上の融通を許す如く見ゆるけれども、然し自由物が經濟財に入つた其の瞬間から更に非經濟物となる迄の間は、其の財は經濟財の範疇を形成して其の間は確定不動のものなることを意味するに疑はない、余は假りに之を概念の實在論的構成と呼ぶ。

此の實在論的概念構成の結果は或る一定の慾望物、行爲、組織を呼んで經濟的と云ふから茲に慾望物、行爲、組織の一定の範疇が少くとも或る期間、狀態關係に於ては常に而して必ず經濟的なるべしとて其の認識の對象に即して論じられ

なければならぬ様になり、或は例へば經濟財は有形物に限るべしとか、又は無形物も入れて可なりとか、或は經濟行爲は獲得行爲にのみ限るべしとか、又充當行爲も之に含ましむべしとか、認識對象に即して實在論的に概念が構成せらるゝ必要が出て来る。其の極如何なる經濟學者も自ら經驗する如く幾多の矛盾混亂を論理の當然としてのみならず、實際上にも惹起し、而かも心理主義に従ふ間は前に見たる如く其の一を採つて他を棄つべき標準は何物もあり得ないと云ふ有様になつて居る。乍併若し此の概念構成に於てカントが其の哲學に於て經驗可能の條件は即ち經驗對象の可能の條件なりと主張したりし如く、經濟學に於ても茲に概念構成上の先天的要素を提げ來りて、之によつて經濟學上の概念―物に非ず―を形成するとせば、此の嚮導觀念に照合せられて認識せらるゝ場合及び關係に於てのみ、經濟學上の概念が形成せられ、對象其自身に於て一定の範疇を形成して對象と概念とが實在論的に結合せらるゝといふ關係がなく、對象の側から見て或ものが必ず經濟的なりとか然らずとか云ふ如きことはな



くなるを得るのである。即ち同じ人も、行爲も、慾望も、同じ物も、組織も、夫々の認識目的に係りて同時に而して同じ状態に於て諸學の對象となつて、夫々の異なる概念が形成せられ得ることとなる。之に依つて實在論的構成を斥くることを得ば、それは又同時に心理發生的に一から他を築き上げて行く概念構成上の心理主義の誤りをも正すことを意味し得るに至る。何となれば經濟概念を實在論的に構成するときは慾望の一種より物の一種を制約し、之より行爲の一種を定め、更に又之より組織の一種を經濟的と云ふ様に、一箇の築造物の如く心理發生的に建造して行くと云ふ必要に促されて來るのであるが、若し之が先天的要素に照合せられて慾望の全部、物の全部、行爲の全部、組織の全部が其があるが如き状態に於て唯一定の關係に於て見らるゝ場合に於てのみ經濟的と稱せらるるとすれば、換言すればカント認識論的に經濟學認識論の根本原理が定められ、其の意義に於てのみ經濟的諸現象が經驗せらるゝとすれば、其の場合には即ち實在論的構成に於ける如く經驗對象に即して一定の範疇を客體的に定む

ること不可能となると同時に、他方には心理主義に於ける如く發生的に一から他を順次に築き上げる必要は全然なく、假令其の必要ありとする場合にも其の概念構成に何等の標準あり得べからざるに迷ふと云ふが如きことなきに至るからである。即ち經濟學認識論上先天的要素としての嚮導觀念を拉し來ると云ふことは一舉にして其の實在論的にして且心理主義的なる概念構成を根本から破壊し得ることを示す。即ち知る、純理經濟學の實在論的概念構成と呼ぶるゝものも畢竟するに斯學概念構成の論理を根本から誤らしめたる心理主義の一面を語るものに過ぎぬと云ふことを。此の誤れる實在論的心理主義的概念構成の論理を打破するが爲に前述の意義に於ける先天的要素を立することを得とせば、茲に初めて經濟學認識の限界も價值も確然として定め得るに至るのみならず、之を定め得る所以の規矩準繩をも併せて發見し得るに至るのである。而して此の諸根本的問題は一に懸つて其の先天的要素の妥當如何と云ふ唯だ一つの問題に集中するを得るに至る。此の如くして純理經濟學は初めて



其自身の正當なる問題を發見し得たと云ふてよい。此の意義に於て茲處にも吾人の認識をして對象に向はしむる從來の經濟學の概念構成上の心理主義的經驗主義に代ふるに、對象をして吾人の認識に向はしむる、カントの所謂「コペルニクス」の態度は必要ではないか。之によつて經濟學概念構成上の嚮導觀念たる先天的要素を研覈して、其が經濟學上の總ての概念に余の所謂 *Begriffliche Umwälzung* を起さしめ、凡ゆる概念の歸趣を示す所以を悟ることは、取りも直さず從來の純理經濟學の概念構成上に於ける實在論的循環論法的獨斷主義を破る所以ではないか。

此の意味に於て純理經濟學の中心觀念たる概念構成上の先天的要素は何なりや、此の如く解せられたる先天的要素は如何なる内在的條件に制約せられざるべからざるかを究むるは余が過去に於ける勞作の主要なる問題の一であった。(拙著 *Geld und Wert*, 1909, S. 153 ff. 及び *Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze*, 1911, S. 60 ff. 參照) 而かも此の如き中心觀念を求むることは經驗科學としての

經濟學の範圍内に於て可能なりとは云ふものゝ、經濟學全般に互りて其の學的知識の先天的要素を形成すると云ふ以上は、其の之を究むる所以の歸趣する所やがて歴史的文化哲學の一たる經濟哲學の建設にあつて、茲處に初めて經驗科學としての經濟學の範圍内に於て、尙且先天的要素の存在することを要すとの理の終極の證明と安靜點とを見出さざるを得ない。而して此の如き意義に於て解せられたる經濟哲學は未だ曾て何人に依りても開發せられたることなき *terra incognita* である。余の前掲舊著書に於て主張したる所謂「貨幣中心論」から進んで此の未拓の境地に入り得るや否やは余が將來の研究の對象たるべきものである。

以上、純理經濟學の現状と其の終極の歸趣は何なりやの一斑を示すことを目的として論述を進め來つたが、其の終極の歸趣に達し得る所以のものは現在の純理經濟學が概念構成上に於て採る心理主義を打破するに於て先づ第一歩を始めねばならぬと余は信ずる。



諸君、上來の述ぶる所によりて明なる如く論理上未だカント前期に彷徨せる我が純理經濟學の現狀を打破し、更に遙かに困難なる經濟哲學の建設に思ひを馳するものは勢ひ Goethe の Faust 中の一句を誦して彼と共に望洋の感を起さざるを得ない、余は今其の句を以て本講演を閉ぢたい。

O glücklich, wer noch hoffen kann,

Aus diesem Meer des Irrtums auszutauchen!

Was man nicht weiss, das eben brauchte man,

Und was man weiss, kann man nicht brauchen.

(大正四年九月二十三日講演)

### 左右田學士に答ふ

(朝民經濟雜誌第九卷第六號所載)

法學博士 福 田 德 三

本誌前號に於て左右田學士はカント認識論と純理經濟學との關係を論ずる該博周到なる一大論篇を公けにし我邦經濟學者の所論の或者に論及する際予が舊著國民經濟原論總論竝に經濟學教科書中に載せたる數言をも引用し綿密なる批評を下されたり。學士が獨り自ら高しとすることなく予等十年前の舊作をまで涉獵する勞を執られしは篤實親切眞に學者の態度を守るものと云ふ可く評論の對象に選出せられし予輩の光榮は偏へに感謝して措かざる所なり。然れども學士は特に評論の便を圖りたるか予が自ら耻づる所の舊著のみを引用するに止め却つて予自ら認承する所の經濟學講義及續經濟學講義の所論を全然度外に置かれしは著者として甚だ遺憾に堪へざる所なり。凡そ學者の所説を論ぜんとする場合に其人自ら數年前に打捨てたるものを取り其公認する新著作は却つて之を度外に置くは必ずしも當を得たりと信する能はず。況ん

左右田學士に答ふ



や未熟未成なる予等常に改説し絶へず訂正して息まざるものに對してをや。予は學士が特に其批評を有力ならしめんが爲めに此くの如き特異的取扱を爲されたるものと信するものにあらざれども此一事を遺憾と感ずることは即ち甚だ切ならざるを得ず。國民經濟原論の書は予自ら明かに之を捨て而も之に代はる可く新たに經濟學講義なる一書を作りたり(此事後書の序文に明なり)經濟學教科書も既に久しく之を絶版に附し目下改稿を企てつゝあるものなり。元より絶版の舊著と雖も一度之を世に公けにしたる以上著者として之に對し責任を辭し得可きにあらず。されば若し予にして同一性質の新著たる經濟學講義を出して改説の趣を公けに告白することなく舊著以來沈黙を守り居たるものならんには學士の評論を機會として其後に於ける思考の結果を述べ改説の實を明かにし兼て學士の批評中其服し難き點と學士の批評によりて誤を悟れる點とを公言す可き義務と權利とある可きなり。然るに予は經濟學講義の一書に就ては絶へず改訂を試みつゝありて其改定第一巻は既に印刷を卒り先覺各位の教を乞ひ得るの日も遠からず。されば予の説に對して批評を惠まる場合には右書並に改定經濟學研究、續經濟學研究の三書に就てなさんことを

切望せざる能はず。最も改定經濟學講義を以てするも學士の立場より見れば予が説は現時通行の Psychologismus に囚はるゝと猶ほ學士の説の Logismus (假りに造語す)に於けるが如くなる可きは勿論にして學士と予と幾葛藤を打出するも到底同一の立場に會す可き見込あるものにあらざるは明なり。然りと雖も學士にして飽迄予等の蒙を啓かんとの親切ありて更らに一層の忍耐を以て予が新著を一讀せられ之に就て批評を下さるゝことあらば予は謹んで學士評論の總てに對し微力の能ふ限り充分の答辭を呈せんことを期するものなり。茲に此次第を開陳して學士に答へ併せて囑望すること爾り。(四、十一、十二)



經濟學認識論の若干問題

So lang' er auf der Erde lebt,  
So lange sei dir's nicht verboten.  
Es irrt der Mensch, so lang' er strebt.

*Goethe.*



### 三 經濟學認識論の若干問題

茲に經濟學認識論の若干問題と題して論せんとする所は純理經濟學上の先天的要素に關するものであるが、今は此の先天的要素の全體に互つて之を系統的に論せんとするのではない。唯經濟學が一個の經驗(後天的)科學にして尙先天的要素を離れては説明を下すことを得ざる所以を若干の方面から觀察して見たいと思ふに過ぎない。即ち第一、經濟學上の諸概念(Begriffe)が純然たる經驗的概念なるにも拘はらず——論理的概念に對立する心理的概念の意味に於ける場合は勿論、純粹概念に對して一般的に云ふ場合に於ても——其の構成に於て先天的要素を缺くことを許さざる理を明にし、第二、一個の經驗的科學としての經濟學全般に於て一の先天的要素を認めずしては經濟學そのものが存在し得ぬ理を宣明し、かくして概念構成に於て又其の歸趣に於て、混沌たる目下の純理經濟學根本原理の解明に資するを得んかと思ふのである。



在來の中學校的論理學の教ふる所によれば一個の概念が形成せらるゝ爲には異中の同をとり所謂抽象によりて諸 Merkmale の普遍性を得、更に之を統一體に集成することを要し、かくして得たる普遍的觀念が概念と名けらるゝのである。カントすらも尙空間が純粹概念なることを説明する條下に通常の概念と認めらるゝものを説明するに次の句を以てして居る。

„Nun muss man zwar einen jeden Begriff als eine Vorstellung denken, die in einer unendlichen Menge von verschiedenen möglichen Vorstellungen (als ihr gemeinschaftliches Merkmal) enthalten ist, mithin diese unter sich enthält; aber kein Begriff, als ein solcher, kann so gedacht werden, als ob er eine unendliche Menge von Vorstellungen in sich enthielte. Gleichwol wird der Raum so gedacht u. s. w.“ Kant, Kritik der reinen Vernunft. 2. A. 1787. S. 39-40.

即ち Begriff を定むるに主要なるものとして Allgemeinheit を擧ぐるの常なることは苟も論理學の第一頁を開いたものゝ等しく認むる處である、余は此の點に對し多大の疑問を抱いて居る。

\*余は Begriff を概念と譯すは不當と思ふ。さりとして之に代はるべき新奇の語を案出するも徒らに讀者を煩はすに過ぎぬと思ひ、我國哲學者の用語をその儘に踏襲する。余には概念と云ふ字は只 Begriff を日本語に書き替へた程の重要以外に意味はない。此の譯語に特殊の意義を附することなからんを望む。

抑も通常の言葉から漸次學問上の概念が形成せらるゝ迄の發展、經過、要件等について或は普遍性 (Allgemeinheit) 或は確定性 (Bestimmtheit) 或は妥當性 (Geltung) を擧ぐる等の事は認識論に關する諸書に説いてあるから茲には説かぬ。嬰兒が父母と他人とを混同する域から脱して一定の具象的事物及經過 (konkrete Dinge und Vorgänge) を一定の言葉に結び付けて、定義の代はりに例を以て答ふる時代を過ぎ、進むで純然たる學問上の考察に於て月の運行と物體の墜落とが共に重なる概念に包括せらるることを悟る迄に進む間に於て、概念構成に當つて其の gemeinschaftliche Merkmale を擧示する場合には判斷の形式によりて之をなすことは疑ひない。而して其の判斷の賓辭たる諸普遍的表象は——此等亦總て概念と云ふべきであるが——其の求むる概念の構成につき必要なる抽象の結果



として出て來たものであると云はるゝのであるが、抑々此の如き抽象をして可能ならしむる爲めには、其の求めらるゝ概念其自身は結極抽象以外何等かの方法によりて既に先天的に得來たりしものならざるべからざるとはシグワルトの云ふ通りである。且又之に加ふるに *gemeinschaftliche Merkmale* を抽出するに要する比較客體の範圍決定せられ、即ち其の比較すべき客體に内存する *Merkmale* が共通なること既に決定せられ居るに非ざれば、一の概念も構成することを得ぬものである。反言すれば、全然前提なき而して純然たる意義に於て、比較抽象を可能ならしめんとして吾人に對するものは何かと云へば、ソツカートの所謂 *extensive und intensive Mannigfaltigkeit der Dinge* (客體の内延的及外延的多様) に外ならぬから、吾人をして比較の可能それ自身をすら否定せしめねば止まぬ底のものとなつてしまはねばならぬ。故に例へば動物の概念を造るには比較すべき客體が既に動物なること疑なき場合に非ざれば不可能であると云はねばならぬ。故にシグワルトは云ふ、*„Ein Begriff (so) durch Abstraction bilden wollen, heisst also*

*die Brille suchen, die Man auf der Nase trägt, mit Hilfe eben dieser Brille“* と此の諧謔の言、言は輕快なりと雖も意や深刻なりと云ふべきである。而かも茲に紹介したシグワルトの擧げたる二つの場合は更に深き論理的根本矛盾の特別の場合に過ぎない。余はこの論理の矛盾そのものに付て疑ひを抱くものである。

\*Stewart, Logik, Bd. I, S. A. 1904, S. 327 ff.

\*\*前掲書 S. 330.

今試みに茲に「樹木」の概念を得べしとする。葉あるものあり葉なきものあり、花あるものあり花なきものあり、果實あるものありなきものあり、樹根深く土に入るものあり入らざるものあり、樹材建築に用ゐらるべきものあり用ゐられざるものあり、千態萬様なりと雖も、日常并に學術上に於て樹木の概念を構成するに同中異を去り異中同を採り來るに吾等は殆ど何等の困難を感じない。況んや樹木の認識に例へば、人の概念を適用せんとするが如きは幻覺の如き場合を除けば兒童と雖も爲さざる所である、何が故ぞ。



之を心理發生的 (psychogenetisch) に見れば吾等は先づある認識對象に必ず結び付けて一個の心理的——日常的不完全なる——又は論理的——科學的——概念を得べしとする、之は事實である。乍併此の場合に外的物體及經過 (äußere Dinge oder Vorgänge) は概念の單純なる緣由に過ぎない。で此の時概念は既に獨立の存在を有せぬか。是余が疑問とする所である。對象によりて概念を習得するは只心理的經過に過ぎぬ。概念は此の時既に對象に即して而かも對象から獨立に存在を保ち得る事、カントが先天的形式は經驗と共に起り來るも經驗より來るものに非ずと解すると類似の見方を許すべしと思はるのである。此の時此の概念が既に獨立の存在を保てばこそ、比較の範圍に入り來る外物を拉し來りて、比較抽象を可能ならしめ妥當ならしむることシグワルトの云ふが如きものがある。然らば抽象に依る普遍性 (Allgemeinheit durch Abstraktion) と云ふことは全然無意義に歸すると同時に此の場合に於ける普遍性は前定せられて居るの故を以て又全く意義を異にして來ると云はねばならぬ。

此の點に於ける余の思想をプラトーンの觀念論に結び付ける必要はない。此の普遍性に形而上學的實在ありと考ふることは、カント以後百年の今日許すべからざることである。只此の如き形而上學的實在を與へずして而かも先天性 (Apriorität) を説くの困難は、尙余の此の小問題にも附いて居るは當然であつて、問題の大小によつて問題の性質上の困難は左右し得られない。余は今如何なる經驗的概念にも、經驗により、經驗と共に起るも經驗より來らず之れより獨立せる das Apriori ありと信じつゝある。

論者の所謂各概念の要素としての普遍性は、抽象によりて純粹なる前提なき經驗的過程によりて得らるべきものに非ずして、日常用なると學術上なるを問はず、認識目的 (Erkenntniszweck) に應じて内容上に改變を許すとするも、論理の形式上は das Apriori を意味するものでなければならぬと余は信ずる。此の點に於て注意すべきは認識目的により内容の改變を許すと云ふは何の謂かと云ふことである。



論理學者に従つて先づ概念を二に分けて考へて見る。一は當初受けたる印象を去る未だ遠からず、臆げに一個の觀念を形成せるに過ぎず、ある事物を見て初めて其の觀念を當て嵌むるの當れりや否やを見極むる如く、定義に代ふるに例を以てする程度の概念を「心理的觀念」と云ひ、科學的方法により明確なる智識を表明するものを「科學的觀念」とするが、前の場合に於て「馬」を以て「牛」とせざるに於ても、馬又は牛に關して明確なる科學的觀念あることを必要としない。只馬を見て牛とせず牛を見て馬とせざるの程度に於て馬の概念、牛の概念あれば足りるのである。此の場合に縱令明確ならず組織的ならず且批判的ならずとも一種の概念は存在する。併し此の如き不明確な心理的觀念が當初受けた印象其のものに過ぎずとせば、初めて見た牛以外の牛は悉く牛に非すと云はなければならなくなる。二牛を比較して前に見たるも牛、後に見たるも牛と云ふには既に初に牛を見て受けたる印象を「緣由」として、一個の概念が先天的に構成せられてあるのでなければ不可能なることである。此の概念に係はりて初めて後

の牛を牛なりと見、更に二牛を比較して一層明確なる概念も構成せらるべきである。此の場合に心理的觀念構成の要因を何處に尋ねべきやは茲には關係はない。必要なるは此の如き概念も印象と云ふ單純なる經驗によりて形成せらるゝには相違ないが、直に之より形成せらるゝものには非ずして、之とは獨立したる構造と存在とを有するものが在りて見ざるべからずと云ふことは是である。次に又此の如き心理的觀念が基礎となつて諸客體が比較計量せられ之が分析抽象せられ、更に其の綜合の結果として一個の類概念(Gattungsbegriff)も出來て來るのであるが、此の場合も前と同様に既に其の類概念の中心觀念が前提せらるることなくしては、或一定の比較すべき客體の範圍を定むることを得ぬ。純然たる歸納により類概念が得らるべしと信ずる一般の論者は、歸納の範圍を定むべき或ものなくして、よく類概念の論理的妥當を生じ得べきものなきことを悟り得ぬものである。此の理は反對に考へると最も明白になる、即ち論者が歸納によりて得たりと思ふ或一の概念をとり來りて之を檢するとする。其の場合に



概念は數個の判斷の形に分析せられ得るからその判斷は必ず一般的、普遍的性質のものでなければならぬ。従つて如何に之を集積結合しても、其の概念其自身を構成し得ず、必ず此の如き判斷を其の概念に附屬するものと見せしむる把持者 (Träger) あらざるべからざると同時に、概念構成上の判斷を一つ一つにとり去つても、尙其處に残る何等かの或ものが其の概念の中心思想として必ず先天的に存在するのでなければならぬ。シダワルトの云ふた二の矛盾なるものは、即ち一概念には必ず此の先天的の根本が存在すると云ふことから派生するに過ぎぬ。もし此の根本を意識の統一作用 (Einheitsfunktion des Bewusstseins) に歸し、之を以て凡ての概念的及び官感的綜合 (Begriffliche und sinnliche Synthese) の基礎とし、之あるが爲めに凡ての内的及び外的現象の一般的結合と繼續 (allgemeine Verbindung; Kontinuität) とを可能ならしめ、吾々の認識中には唯だ一の空間、唯だ一の時間、唯だ一の經驗あるのみなるも、主として意識が統一なるにより然るものなりとし、之に依つて今云ふ概念の所謂根本なるものも、又此の意識の單一なることにより

て説明せらるべしとするものありとするも、其は誤まれりとは思はぬ。乍然茲に論ずるのは寧ろ此の如き意識の維持及統一より生ずる作用として各概念に存在する中心思想あり、之が各屬性の負擔者把持者として認識せらるべしと云ふことである。是余が諸經驗的概念の先天的要素と呼ばんと欲するものである。之が心理的概念の場合に於ては日常一物を他物と混する勿らしむる等置及區別 (Eihssetzen und unterscheiden) 以外の認識歸趣 (Erkenntnisziel) は必要でないが、科學的概念となれば單純に馬を馬とし牛を牛とすると云ふ丈には止まらず、生物學、動物學、力學、技術學等に於て夫々特有の認識目的に應じて其の概念が形成せらるべきである。而かも共に其の各場合の認識目的に應じて定められたる觀念は日常用及び學術上の概念を形成するに先天的要素となり、之に導かれて概念構成素材の撰擇比較が可能たるに至るのである。即ち抽象による概念構成には如何に經驗的過程を遂究するとしても、豫め先天的に概念として定められたるものあるに非ずんば、其の概念其自身は構成せられない。而して此の先



天的要素は一に認識に於ける歸趣に照應して定めらるべきである。

## 二

此の論一見矛盾なるが如く見ゆる恐があるけれども、此の相關關係を見ずしては概念構成論は到底成立し得ない。概念構成が分析抽象によつては成し遂げられぬと云ふことはベルグソンの説に思ひ合はして考へると頗る興味がある。

ベルクソンの論理主義及び合理主義を排斥して直覺主義を唱道する説を茲に事新しく述ぶる必要はない。只從來の哲學が創造及び進化と見るべきものを「Le mécanisme cinématographique de la pensée」によりて截斷し、*la duree*に關して何等の考察を遂げぬのは *Yelan Vial* を解する所以に非ずとして直覺を稱揚するは、他に哲學史上多く存在する直覺説の論者と共に確に一面の眞理を語るものである。而して概念構成論に於ても亦論理主義に於ける思惟の普遍性に對するベルグソンの非難と同様の關係が見らるべきことである。即ち一概念は數個の

判斷の集和によりて成るとしても、如何に完全に集和しても、到底説く事を得ざる概念の核心は終極に於て残ると云はねばならない。反對に、此の中心思想あればこそ初めて幾多の判斷は一概念に附屬するものとして集和せらるゝのである。此の概念の中心思想、諸 *Merkmale* 諸判斷を概念構成の部分として結合する核心其自身は決して此等諸 *Merkmale* 諸判斷より導き出すことを得ない。活動寫眞的に、合理的に、斷片的に屬性とせられたる諸 *Merkmale* — 此亦概念なり — は之を或一の概念の *Merkmale* とするには、其の概念それ自らが前提せられ確立せられ居ることを要するのである。故に其の *Merkmale* の集和結合のみによりては概念其自身は到底出て來ない。恰もベルグソンが用ゐた有名なる比喩、即ち巴里を知らぬ外國人が如何に明細に又如何に多くの斷片的 *スケッチ* を與へらるるも、此の都を親しく知れるものゝ巴里なる言葉に結び付くる印象は到底之を得る能はずといふに類する。

余は此の概念の先天的要素の感受に直覺を要するや否やと云ふ點をベルグ



ソンの倣ふて又は彼に反對して唱道するの暇を有せぬ。余は唯だ此の如き先天的要素が概念中にありて、初めて概念の構成を可能ならしめ、從て諸概念要素も Merkmale として存在するを得るに至ることを明にしたいと思ふに過ぎぬ。即ち從來の論理學が教ふる如く共通の Merkmale の分析抽象によりて一の概念が形成せらるゝとするは論理の轉倒である。同様の理由で歸納によつて、經驗的歸納的法則を得べしと云ふは論理の矛盾を包含して居るものである。經驗的歸納的法則によつて將に得んとし、將に定めんとする中心思想は、却つて先づ之を前提とし豫定することなくしては、法則素材の撰擇、排列及び其の之よりの歸納其自身を可能ならしめ得ぬと信ずる。

之を要するに一概念の構成に先天的要素の存在を認むるは論理の當然の要求である。而して其の先天的要素なるものは其の概念構成の認識目的によつて左右せらるゝものである。故に同じく「人」と云ふ概念も之を論理學に於て見ると、生理學に於て見ると、經濟學に於て見ると、社會學に於て見るとは夫々に異

なる。此の場合に概念構成に於て先天的前提となるべき觀念は、各學の認識歸趣に應じて異なるものと見ざるを得ない。是プラトーンの「イデア」の如きものと最も分明に異なる點である。形而上學的實在の本質を定むるを以て概念構成の本義としたるプラトーンの論は、其の觀念論より來る當然の歸結なるも、此の如き形而上學的實在の本質を概念構成に前定するは、若し可能なりとするも知的直觀 (intellektuelle Anschauung) の界に屬すべきものである。余は此の點に於て飽くまでベルグソン流の直覺主義を奉せず反つて彼が極力非難する論理主義の遵奉者として止まらねばならぬ。諸經驗科學の概念構成に於ては只各學の認識歸趣が先天的要素の内容を定むる制約的要因たるものであると主張したい。故に例へば倫理學上の「人」と云ふ概念は倫理行爲をなす人を數多集めて其の中より共通の Merkmale を抽出し、之を統一體に集結して形成せらるゝものではない。此の如き過程は寧ろ倫理學上の「人」と云ふ概念を前提として初めて行はれ得べきもので、其の前提とすべき概念は倫理學上の認識目的によりて制



約せらるべしと信ずる。此の意義に於てカントに従へば一の道德的主體 (ein moralisches Subjekt) とは理性と意志とを有する一切の存在 („jedes Wesen“) なりと云ふが如きものである。此の „jedes Wesen“ を指して倫理學上の道德的主體と云ふは決して歸納の結果として可能なるべきものではない。

② 茲に於て概念構成の實際上の中心問題は、其の學問の認識目的は何なりやと云ふことに歸する。即ち一學の認識目的が定まり居るにあらざれば其の學の概念は到底決定するを得ない。而してその學に特有なる概念なくしては其の學は他の學と區別する論理的確立 (logische Begründung) を得能はない。或一學を論理的に確立すとは、其の學が特有の認識目的を有することを論理的に證明することである。實際上の便宜如何によりては一學は他學と區別して存在する論理上の權利を有するを得ぬ。或一の學問が文化の改進と共に發生するとし而して之を論理的體系に於て立證せんとせば、其の學問が他の如何なる學問によつても未だ嘗つて闡明せられたることなき、而して又他の學問によつて闡

明せらるることを得ぬ一定の認識目的あることを要する。一學問の興廢は此の認識目的の存否に係る。

今我が經濟學に於て諸概念が混沌として歸趣する處を知らざるは、前に述べた如く如何なる經驗的概念も先天的なる且つ其の學の認識目的によつて内容的に制約せらるゝ觀念あるを忘るるより來るのである。否、抑も經濟學の認識歸趣が何なりやの間を起すことすら知らずして過ぎた我が經濟學が其の有する諸概念雜然として歸一する處を知らずして今日に及んだのは寧ろ當然である。云はねばならぬ。今余が當面の問題とする所は此の二點を究明するに在る。實に是經濟學認識論上の重要な問題である。

## 三

上來述べた如く諸經驗的概念には必ず *das Apriori* ありとするとは、經濟學上の如何なる概念にも何等の留保なしに適用せらるゝ論である、故に茲に重ねて之れを論する要はない。唯だ概念の *das Apriori* が經濟學にもありとすること



が實際問題として經濟純理考究の上に必要たるは、其の *das Apriori* が經濟學上の *das Apriori* としては經濟學其自身の認識目的に制約せらるゝからである。従つて余は茲に主として經濟學の他學と論理上分岐せられて獨立の存在を保有するに付ては如何なる斯學特有の認識目的が存するか、の點を明にしたいと思ふ。

凡そ一個の學問が獨立の存在を保有し得るは、原則として其の學の客體其自身に制約せらるゝ爲めにあらずして、認識對象が吾々の認識に依り、而して吾々の認識に於て、統一的體系を保つにのみよるのである。客體其自身によりて制約せらるゝ場合は客體が認識主體の認識を制約して、統一的體系を強ひ得る場合にのみ限る。故に認識の成果が統一を保つや否やに依つてのみ一學問が論理上獨立に成立するや否やが決せらるゝのであり、従つて同じ認識客體に付ても其の認識目的の相違により種々異なる學問の對象となり得るのである。故に、或る客體が豫定的に必ず一學の對象たり得とか、又は反對に、必ず他の學問の

對象たり得すと云ふが如きことは斷じてあり得ない。天地間の森羅萬象が或は社會學の對象となり、或は經濟學の對象となり、或は商業學の對象となり、或は地理學の對象となり、或は物理學の對象となり、或は心理學の對象となり、或は史學の對象となるは、一に其の學の認識目的によりて、認識對象が吾々の特殊の思索體となり、統一的の體列に參するからである。學者が時に學を分て自然科学と歴史となるとするは、畢竟は吾々の認識對象の構成を前者は合理的、後者は非合理的、従つて前者を普遍化に、後者を個性化に向はしむるに依るもので、決して認識對象の素材的區別によりて兩學の理論的性質を確定する次第ではない。<sup>\*</sup>即ち吾々の認識の論理的構造の上の二元主義に制約せられて、吾々の認識成果が之より離るゝことを許さぬから、之から特殊の認識目的が生じ従て以上二の科學が発生するのである。故に此の點に於けるリツケルトの説に余は不服なきを得ない。現にリールは此の認識論上の二元主義をすら無視して、*Die Wissenschaften geschieden durch ihre Gegenstände, sind durch die Methode zur Einheit des Wissens ver-*



bunden" \*\*と云へ稱へて "Einheit der wissenschaftlichen Methode" を主張して居る。余を以て見ればリールは吾等が認識の一面をのみ見るに急なるものと評せざるを得ない。何となれば一面に於て凡ての認識対象を合理化し得ることは誠にリールの云ふ如くであるけれども、他面に於ては非歸一的 (unreduzierbar) の Irrationales あることを忘却したものと思ふからである。只認識目的の統一を主張する氏が、認識の統一を主張するのは當然であつて、認識対象の素材的區別により「知識の統一」は害せらるゝとなしと云ふは氏の立場から見ても至當である。只氏の所謂知識の統一なるものが茲に重大なる問題となる丈である。要之認識の成果が、特定の認識目的によつて其の體系に列せらるゝ所に、凡ての學問が成立するのである。其の認識目的が吾人の任意遇然に定むる所なるか即ち實際上の便宜と云ふが如き理由によつて定めらるゝか、又は吾々の認識の構造それ自身によりて定めらるゝかは一般の問題であるが、任意に定むるとしても、其の論理上の理由なくしては學としては成立せぬ。従て各學の認識目的は畢竟する

に各其の論理上の特殊の *raison d'être* を有さねばならぬのである。

\* 拙著 *Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze*, 1911, S. 23 ff. 参照

\*\* *Die Kultur der Gegenwart*, Bd. I, Abt. VI, S. 86.

然らば我が經濟學の認識目的の性質は如何なるものか、其の論理上の根本は如何と云ふ問題が起る。

今茲に呉々も斷つて置かねばならぬ、余は今經濟學の認識目的従つて經濟學そのものゝ *raison d'être* を試むるのではない。カント以前にも既にケプラー、ガリレイ、ニュートン等ありて自然科学は確立して居た。而かもカント起つて自然科学は初めて論理的に立證 (*Begründen*) せられた。今此の如き意義に於て余も亦本論に於て經濟學の論理的立證を試みんとする努力に若干の貢獻をしたいと思ふに過ぎぬ。而して經濟學の論理的立證をなさんとするには經濟學の學としての位置を定むることが先決問題である。

認識に於ける批評主義の特徴は超越的、先天的認識要素と經驗的、後天的要素



即ち認識に於ける前提としての形式と經驗たる素材とが理論上分岐し而かも事實上結合せらるゝと云ふ點を究明したるにある。此の認識の論理的構造を形式と素材とに對立せしむるに關して起りたる幾多の論争は茲に顧みる要はない。唯だ此の合理と非合理との二元的分岐を基礎として之から出發して學が如何に區別せらるゝやを見れば足りる。試に左に之を表示する。

哲學——理性(Vernunft)に關す

aprioriなる Rationales に

基礎づけらるゝもの

純正數學——純粹直觀(reine Anschauung)に關す

純正自然科學——純粹悟性(reiner Verstand)に關す

aposterioriなる Irrationales に基礎づけらるゝもの——歴史

此の内經濟學に關し吾等が問題とすべきは自然科學と歴史との二者である。素とカントは自然科學を論ずるに當つて其の經驗の可能に對して論理的根據を與へ、之により自然科學の可能其自身を立證した。其の意純粹悟性の批評を與ふるにあつて、經驗的悟性の理論を與ふるにはあらざりしが故に „Analogie

der Erfahrung“ と稱せられたる Grundsatz der Beharrlichkeit der Substanz, Grundsatz der Zeitfolge nach dem Gesetze der Causalität 及び Grundsatz des Zugleichseins nach dem Gesetze der Wechselwirkung, oder Gemeinschaft——命名は凡て Vernunftkritik 第二版による——の如き經驗をして可能ならしむる最一般的方法則の證明に勉めて、之等を以て個々の besondere empirische Naturgesetze とは全く區別すべきものとした。即ち前者は Gesetze des Empirischen にして後者は empirische Gesetze と稱すべきものである。<sup>\*</sup>之が爲めに個々の經驗科學の地位につきて幾多の論争を惹起しヘルバルトの如きは然らば何處より對象の特殊の形態や關係やは來るかと反問するに至つた。

<sup>\*</sup>カント自ら曰ふ, „Wir müssen (aber) empirische Gesetze der Natur, die jederzeit besondere Wahrnehmungen voraussetzen, von den reinen, oder allgemeinen Naturgesetzen, welche, ohne dass besondere Wahrnehmungen zum Grunde liegen, bios die Bedingungen ihrer notwendigen Vereinigung in einer Erfahrung enthalten, unterscheiden, und in Ansehung der letztern ist Natur und *nöthige* Erfahrung ganz und gar einerley,……“ (Prolegomena, 1783, S. 113)云。

カントの此の説に拘はらず、之を極端の境地に導いてしまつたのはフキヒテ



である。カントの意は意識の統一作用より經驗の形式的統一を導く以外に出でざりしものを、フキヒテは凡ての經驗を内容上より見て自我より抽出するに至つたのである。此の如きは後世の *Methodenlehre* を研覈するものに甚だ困難なる問題を残したに相違ない。只此の點に於て深く考ふべきことは或程度迄は、經驗的認識と雖も、又先天的形式的認識の中に含まるゝと云ふことは是である。經驗的認識も一般的認識の條件に従ひ普遍的形式に攝取せられて經驗として成立するに至るが故に、此等の經驗より各種の自然法則が出来れば此等は即ち經驗的なりと雖も尙ほ論理的法則と稱せざるを得ない。換言すれば經驗的法則も *Gesetze der Empirie überhaupt* に制約せられて之によりてのみ其の成立可能となるものであるから、其の本質に於ては亦此の法則と同一の論理的性質を有すると云はざるを得ない。此の如く論せらるゝときは各種の經驗科學も自然科学的の考案に入るときは、畢竟先天的根本原則に支配せられなければならぬといふ結論に達する。故に各種の經驗科學は此の方向に於ては其の究極に

於て合理化せられ而して科學的方法の統一に到達せざるを得ない。乍併他方には此の如き先天的形式に對立する認識素材たる *Empirie* は結極 *Irrationales* として存在することを否定するを得ぬ。勿論余は其の *Irrationales* それ自身が直に歴史を形成するとは云はぬ。*Irrationales* が歴史の形をとるには尙一定の認識形式に攝取せらるゝを要すると無論であるが其の形式は純粹悟性の根本原則ではなくして自ら別種の思惟の法則原理によつて支配せらるべきである。

抑々經驗を最も始め可能ならしむる最一般的法則は *Empirie* よりは生せぬと同時に *Empirie* は又逆に此等の最高法則より出て來ない。若し然らずとすれば經驗は此等根本的法則に客觀的妥當を與ふることを得ぬものなるにより、一切の法則は勿論一切の經驗も凡て概念のみより生ずることとなりて茲に再びカント以前の形而上學を現出せねば止まぬこととなる。此の如く *irrationelle Empirie* が經驗の依つて以て可能となる根本原則に對立して、相互に非歸一的たる點に於て余は自然科学に對して他に一科學存在せざるべからざる理由存せりと信ず



るのである。而して之れより幾多の迂餘曲折を経て發生したる認識成果は即ち自然科學に對立する歴史的學問である。カントは「純粹理性批判」に經驗と法則との對立を説いて、*Erfahrung lehrt uns wol, was da sey, aber nicht, dass es gar nicht anders seyn könne* \*と云ひ明かに吾等が認識に二の *inkommensurable Grössen* が對峙して居ることを説いて居る。ゾケンデルバンドの用語を使へば一は *das generelle apodiktische Urtheil* に向ひ他は *der singuläre assertorische Satz* に對するのである。前者の建設は自然科學の認識目的に従ふものであつて、後者の樹立は歴史の認識目的に答ふるものである。\* *Positivismus* の主張の如く、*aus der Geschichte eine Naturwissenschaft zu machen* \* 歴史を一の自然科學に建造すとは既に獨逸の學者の論じた如く不當と云はねばならぬ。

\* 同書 I. A. S. 734. 論 *Prolegomena*. I. A. 1783. S. 72. 参照

\* ソクラテスが凡ての學術的思維の根本を普通の特殊に對する關係に於て見、プラトーンが前者に、アリストテレスが後者に實在を認めたることは希臘哲學史上一般に知られたる事實である。

## 四

此の學問の體系中に於て經濟學は如何なる位置を占むるや、經濟學は自然科學に屬するか、歴史に屬するか、其の兩者に共に屬するか、或は其の兩者の何れにも屬しないか。

余は上來論する所に顧みれば經濟學は斷じて自然科學に屬しないと信ずる。當代の先進シエモラーは其の壯時の極端なる主張を緩和して遂には、*der Drang aller Wissenschaft, mit der Zeit möglichst deduktiv zu werden* \*と云ふことを力説して我が經濟學の最終の目的亦正に然るべしと云ふて居る。此の主張が論敵カール・メンガーの所謂 *Theoretische Nationalökonomie* の建設に相當するものなることは云ふを俟たぬが、兩者共に此くして成立すべき學問が正當に學の論理上の性質より見て *Höchstens* 「經濟心理學」と命名せらるべくして、而かも其の學問の體系上自然科學としての心理學の一部をなし、最早經濟學の範圍内にあらざるべき理を悟らざるに於て其の揆を一にして居る。茲に諸學者の議論を一々紹介する煩



に堪へない。殆んど凡ての經濟學者が經濟學の認識目的をデーツェルと共に  
 „Die Wirtschaftstheorie ist... die Wissenschaft von der spezifischen Wirkungsweise des wirtschaftlichen Motivs als eines der psychischen Causalmomente menschlichen Handelns“ \*\* とする  
 に一致する。只多くの學者はデーツェルの如き論理的頭腦を有せざるが爲めに、  
 之よりも生温るき立言をなすに過ぎない。徹底的に考ふるものは此の窮極  
 を認容せざるを得ない。

\*G. Schmoller, Grundriss, I. 1908, S.110.

\*\*H. Dietzel, Theoretische Sozialökonomik, 1905, S. 76.

此の殆んど凡ての經濟學者の論に向つて余は只簡單なる一問を發したい。  
 もし之が經濟學の終極の認識目的なりとするならば、經濟學は畢竟するに一自  
 然科學としての心理學に攝取せられて、何處に經濟學獨特の、之によりて學とし  
 て獨立するを得る *das endgültige Erkenntnisziel* があるかと。余は不幸にして心理  
 學以外に經濟學を獨立の學として論理上の根基を與ふべき認識目的なくして、

何故に自然科學の外に又は其の中に經濟學に獨立の位置を與へ得べきかの理  
 由を觀取するを得ぬ。

もし從來の經濟學の認識對象が内的精神的現象のみに止まらず外的物理的  
 現象に關するものあるにより、此の方面に於ても、尙自然科學の認識目的を以て  
 經濟學の認識目的とするならば、自然科學としての技術學、力學、總じて物理學以  
 外何物か學として論理上の存在を保ち得るか。

もし經濟學の認識目的にして其の對象が内的外的の現象たるに關せず、自然  
 科學の如く概念にのみ *aufgehen* するものなること世の一般の經濟學者の論ず  
 る所の如からんには何處に經濟學の論理上の獨立ありや。將又經濟學が論理  
 上の獨立ありと主張するものは何故に此の論理の矛盾を見得ざるか。

五

然らば經濟學は歴史に屬するか。

經濟學の對象が人類の經濟生活にあること云ふ迄もない。其の經濟生活の



生起、發達、沈滯に外界が交渉することは、凡そ人類生活が此の現在の構造の世界に於て營まるゝ以上然るべきこと勿論であるが、此の場合外界は凡て歴史生活乃至人生一般に關聯して意義あるものと見らるゝ所にのみ吾人の考察に入り來るのである。此の交渉を離れて學問の對象となるときには、自然科学が成立することは前に論じた。而して人類の經濟生活が人生 überhaupt の一方面的解釋の認識成果なるを悟らざるは、人類の歴史的生活が「與へられたるもの」として「其が實際にありし如く」(„wie es wirklich gewesen ist“)に之を記載するもの即ち歴史なりとの認識論上の誤れる naiver Realismus より來る結果に過ぎぬ。凡ての經驗は吾人の認識の條件形式を経て初めて經驗となるにより、人類の歴史生活も亦吾人の認識の先天的 *offen* に照合せられ、先天的形式によりて初めて歴史生活として認識せらるゝのである。故に „Schwelle des historischen Bewusstseins“ 以下又は以外にある人類の歴史生活が「與へられたるもの」として如何なるものなりやは全く吾人の認識以外に在る。此の如く歴史的概念主義 (historischer Idealismus) の

立場に立つて見れば、經濟生活は人類生活の一方面的解釋であつて、而して其の解釋を可能ならしむる所以の根基たる認識目的は即ち學としての經濟學をも亦可能ならしむるものである。

抑々經濟乃至經濟生活と云ふ事が物理学上の *letzte Dinge* としての *Atom* 又は心理学上の諸 *einfachste Elemente* の如く一切の時處を離れて成立し得べき概念に非ずして、其の中心概念が *irrational* なる認識素材に制約せらるゝ處に初めて意義あるに至ることは明かであつて、一般的に歴史を可能ならしむる論理に基くこと云ふ迄もないことである。此の意義に於て經濟生活を對象とする經濟學が歴史に屬することは明かである。此の認識目的に制約せられたる上での認識對象たる經濟生活が、その表面に於てのみ *Generalisierung* の行はるゝことは可能なりと信ずる。其の成果は即ちメンガーの所謂 *Theoretische Nationalökonomie* と稱するものであつて、世の多くの論者が誤まつて、經濟學には經濟史以外に理論的部分あつて、茲に因果法則は求められ、之を以て學問の要なり、學問の最終の目



的なりとするものである。併此の Generalisierung が經濟學の最も奥に潜める認識目的に制約せられ、所謂 historischer Idealismus によつて、吾人の認識成果となつて上つて來た其の表面に於てのみ可能であつて、從つて此の意義に於て所謂歴史的法則「經濟法則」が可能であると云ふ理を見誤つたのである。もし此の場合に經濟學自身の認識目的を先天的内在的條件として、初めて人類の經濟生活が吾人の認識に上り來ることを忘れて、時處に全く制約せらるゝことなき generalisierende Begriffe に aufgehen せしめ、所謂「經濟法則」なるものも自然法則なりとするならば、又實際論理上の自然法則が其處に求めらるゝならば、則ち經濟學は此の場合全然其の影を潜むに至つて、其の代はりに現はれ來るものは、一自然科學としての心理學あるのみである。所謂 individualisierende und generalisierende Begriffsbildung は各其の論理的要求に從つて只此の一定の認識論的表面に於てのみ可能である。而かもそが凡て經濟學の對象として存立することを得んには、飽く迄一切の概念、一切の認識は經濟學の認識目的に制約せられてあらねばならぬ。リンカー

トが歴史と自然科學との間に中間範圍 \* として生物學、經濟學等を説く所は確かに此の重要な點を看過したものである。曩に拙著「Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze」に於て余は此の點を明かに論じて置いたが der endgültige Erkenntniszweck に於ける Mittelgebiet, Mischform は認識論上無意義なるのみならず一個の矛盾である。das endgültige Erkenntnisziel は必ず歴史、自然科學の何れか一にあらねばならぬ。其の内の一に位置を占めて而して其の表面に於てのみ個々の概念が或は普遍化に、或は單一化せられて認識に上り來ることは妨げないが、其の場合に窮極の認識目的に於て兩者共に與かり得るとするは、吾人の論理が之を許さず吾人の認識機關は其の不能なるを訴へる。此の兩者に共に與かり得と説かんとするものはライプニッツの昔に歸つて veritas æternelles は其の根原を神の悟性に、veritas de fait は其の根原を神の意志に覓めたるが如くせねばならぬ、余はその可なる所以を知らぬ。

\*Rickert, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft. 2. A. 1910. S. 103 ff.



之によつて經濟學の學としての位置は明かになつた、是やがて經濟學の認識目的に一個の濃厚なる色彩を與へ、傍ら余の史學認識論に於ても世の論者の多くに反對する意見の一斑を間接に示し得たと思ふ。今此の點に關聯して解釋せらるべき問題は、然らば經濟學の認識目的が歴史全般の認識目的と區別せられて存するは何によるか、換言すれば史學としての經濟學の特殊の認識目的は何によりて表明せらるゝか。

余は此の點に關しても既に前掲著に於て述べて置いた通り此の如き經濟學の認識目的は二の條件によりて内容的に制約せられなければならぬと思ふ。即ち一は凡て經濟的と稱せらるゝ一切の現象は、それを全體として見るときには、他の社會的、歴史的、乃至自然現象と區別する爲めに、此の如き中心的 *Isolende Identität* なくしては決して他の *Merkmal* を發見するを得ぬと云ふ様なものでなければならぬ。即ち現今の經濟組織、經濟生活に對して論理上の *Apriorität* たり得るものでなければならぬ。他方には第二の條件として經濟なる概念が其自身

歴史的な概念なるの理由によつて、此の如き中心觀念其自身も亦經濟組織と同様に、一個の歴史的產物であつて、經濟組織の前提とも稱せらるゝものに對して、其の認識論上の意義に於ても、又其の歴史上の生起に於ても相互的に制約するものでなければならぬ。恰も人類の法律生活を解釋する法律學の中心思想が權利義務にあつて、一切の人類行爲が法律學の對象となる爲めには、此の概念なくしては他學と區別すべき認識目的を失ふと同時に、權利義務の兩概念も亦其自身一個の史的產物であつて、今日の法律生活に認識論上にも、又史上の生起の上から見ても相互に制約するものある様の如きものが、經濟學に於ても其が獨立の一學科たる爲めには必要であつて、之ありて初めて經濟學は他學と別れて一個の獨立を保ち得るに至るのである。

※前掲著の T. a.

余は此の二條件を充たす經濟學の中心思想を求めて之を貨幣に得た。一切の人類の歴史生活が貨幣概念に *Hezeln* せられたるときにのみ經濟學の對象は



是あるを得。即ち經濟學の認識目的は人類の歴史生活を Geldbegriff に bezeichnen して解釋する所に其の表明を得べきである。此以外に經濟學の認識目的を内容的に制約することは斷じて出来ない。

余は行論の順序として茲に此の如く解せらるべき貨幣概念が如何なる認識論上の性質、構造、重要を有するかを説かねばならぬが、茲に所謂「貨幣中心論」は余自身には少くとも十年以來の思索の結果であつて、舊著 Geld und Wert, 1909. にも Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze, 1911. にも夫々必要の條下に於て、機會ある毎に詳しく述べて置いたから、讀者もし本論讀過の際に多少の興味を得たら同書を一讀するの煩をとられんことを希望するに止めて置く。

◎余は經濟學の認識目的に内容的決定を與ふる das innere Merkmal は貨幣概念にして之に Bezugnahme することによつてのみ經濟學に特殊なる認識目的は吾の認識の上に表はれて來、之によつて經濟生活は一種の歴史的生活として他の人類生活と區別せらるるに至ると信ずる。乍併經濟學の認識目的其のもの

(一) 貨幣は「モノ」  
(二) 貨幣は「モノ」  
(三)

は他の凡ての經驗的科學の認識目的に於けるが如く、その學の Sollen として形式的のものであつて何等の内容をも與へらるゝものでない。此の Sollen を考究することに於て經濟學の對象たる經濟生活の Sein を尋ねることが意義を有するのである。

六

凡そ一經驗科學の哲學に對する關係は二様に見らゝることジムメルの云ふが如きものがある。一は經驗科學の下限に位して其の學に特殊の認識論的根基を與へ、其の前提と形式とを供するものなるが故に、如何にして其の學がカントの用語例に従ふて「可能」となるやを示すものであり、反之他の一は經驗科學の上限に位し其の學の對象とするものゝ個々のなるを begriffliche Vollendung に導くものにして、其の對象が人類生活ならば其の生活の終極の目的及び意義は何なりやを闡明するは在る。一をその經驗科學の認識論と稱し得べくんは他は其の學の形而上學と稱し得べきものである。



\*Simmel, *Geschichtsphilosophie*, 3. A. 1917, S. 154; *Derselbe, Soziologie*, 1908, S. 25.

上來の論ずる所は此の比喩に於ける經濟學の下限のみに就てである。換言すれば經濟學認識論に基礎を與へんと欲したに過ぎぬ。乍併退いて考ふるに凡そ人類の歴史生活が歴史の對象として自然科學と離れて、一個の認識目的を有せしむる爲めには、既に説いた *historischer Idealismus* には内在的なるべき且先天的なる一個の *logisches Sollen* がなければならぬ。而して此の論理的 *Sollen* が歴史に關しては其の歴史的<sub>1</sub>生活の中心思想たる *Kultur* (文化) によりて其の内容が制約せられなければならぬといふ意味に於て、一個の文化價值 (*Kulturwert*) でなければならぬは勿論である。經濟現象が人類生活全般の一面的解釋として可能となり而して經濟學の對象となり得る爲には、一般的文化價值に係て其存在を見而して尙又之と區別せられて特殊の存在を認め得可き者でなければならぬ。即ち文化價值の内殊に經濟的なる或特有なる價值に *beziehen* せられて初めて經濟生活は我等の認識に上り來り、かくして抑も經濟生活は可能となる。此

の如き論理上の *Sollen* は經濟生活が人類生活の一方面的解釋なりとの理由により「經濟的文化價值」と稱すべきである。此の如き文化價值が *allgemeingültig* なるとは他の文化價值と其の性質に於て何等の差なきと勿論である。經濟學認識論に於ては職として此の如き普遍的妥當性を有する經濟的文化價值なくんば抑々經濟生活は認識論的に可能性を與へらるゝものに非ざることを論ずるものである。故に余は上來の論述に於て此の如く解せられたる經濟生活を可能ならしめんが爲めに、内容的制約を與へんと欲して貨幣概念を拉し來つたのである。更に進んで、此の如き内容的制約により其の明かなる表明を得た所謂經濟的文化價值の性質、構造、重要及び其の他の文化價值に對する關係等を究明するは所謂「形而上學」たる經濟哲學の任とする處である。此の如き經濟哲學の對象たる經濟的文化價值が形式として *Sollen* として、*Leisten* にして立つから、之によつて經濟學認識論は可能となり、之が可能となりて經濟學に論理上の前提を與ふるにより經濟學の對象が可能となり、かくして又その對象たる經濟生活



が向ふ歸趣目的意義が *Sollen* たる經濟的文化價值に示され、而して之に照合せられて其の認識論上の重要が決定せらるゝのである。此くして一經驗科學たる經濟學の下限は上限と相互的に制約する關係に在ることを容易に見得る。即ち吾等が經濟學を可能ならしめた半面は、經濟生活の意義を確むる經濟哲學の半面である。茲に於て哲學の個々の經驗科學に對する關係は上限と下限とを制約すと云ふことは、寧ろ一片の比喻であつて、事實に於ては此の兩者は一體であると云はねばならぬ。形式上の *Sollen* なくして認識の *Bedingung* は與へられず、*Bedingung* を與へられずして *Sollen* たり得るものはない。此の形式的 *Sollen* はあつて初めて個々の經驗的科學可能となり、兼ねて此の如き *Sollen* はその對象の歸趣を示すものである。個々の經濟生活が經濟學の對象たるには此の如き形式があり、先天的要素があつて、初めて可能となり、其の意義を示すのである。經濟學に於て現に行はるゝ *naiver Begriffswissenschaft* や *Psychologismus* の論者例へば欲望より出發して經濟行爲を解し、經濟組織を解し、經濟を解せんとする論者の

如きは此の點に想ひ及ばぬものである。

吾等は今や經濟哲學の最終の問題に對しつゝある。經濟生活の歸趣、目的、意義は何なりやを研究する一面は、普遍的妥當性を有する經濟的文化價值の一般的文化價值並に他の個々の文化價值に對する地位を明にするにある、而して其の價值と内容的制約との關係を尋究する處に哲學の問題は在る。是やがて經濟價值論なるものが一經驗科學としての經濟學の範圍内に於て一個の *Sein* として難問を形成するに止らず、他面には經濟哲學の最終の問題として一個の *Wesen* として、吾々の解明を要求する所以を示す。茲に經濟哲學の出發點と歸趣とがある。經濟價值論は此の意義に於て經濟哲學を意味し、經濟生活の窮極の意義は茲に決定點を見出すのである。此の意義定まつて初めて一經驗科學としての經濟學はその *terminus a quo* と *terminus ad quem* とを決すべきである。併し之は最早「經濟學認識論の問題」として論すべきではない。之を基礎として經濟生活そのものゝ *Sein* を尋ぬるによつて定めらるべき問題である。換言すれば歴



史哲學の問題として經濟哲學が論せられねばならぬ所以である。其の研究は  
余が向後繼續せんと欲する所である。(大正四年八月四日稿)

經濟政策の歸趣



#### 四 經濟政策の歸趣

(大正四年十月廿四日社會政策學會第九回大會講演)

諸君、茲に私が「經濟政策の歸趣」と題して論せんとする所は、經濟政策は如何なる安靜點、如何なる歸著點を有するかと云ふことを明かにするにある。「經濟政策とは經濟生活をして或一定の方向を取らしめ其の究極に於て或特定の結果を生ぜしむべき意識的努力を指稱するものに外ならざるが故に、經濟政策の歸趣が何であるかを見る爲には、先づ經濟生活の歸趣は何であるか、經濟生活の意義(獨乙語の Sinn) 目的は何であるかと云ふことを見るを要する」。即ち經濟哲學の問題に觸れざるを得ない。今日の聽講者の多數の方には、或はちつと御迷惑であるか知れませぬけれども三四十分間思ふ存分理窟を捏ねさして貰ひたいのであります。

さて經濟生活とは人類の文化生活の一面的解釋なるに疑を挿むべくもない。



而して此の人類の文化生活と云ふものは、勿論内面的生活であつて、其の内界生活の發生に外界の自然、例へば氣候とか或は其の一國の地理上の地位とか云ふものが構成的原因、要素を形成するとしても、それは人類の文化生活に交渉を有すべしとする範圍並に關係に於てのみ意義がある故に、經濟生活と云ふのは畢竟するに内界生活として見たる人類の社會的文化生活全般の一面的解釋であると云ふことが出来る。

凡そ内界生活及び外界自然の兩方を通じて吾々が之を認識するに當つては、既に Paul, Naville, Simmel 殊に Windelband, Rickert の稱導したやうに凡そ二つの見方がある。即ち一は吾々の興味を有つて研究する事物及び經過には、其の多くのものゝ間に共通なものが存在すると云ふ事實に基して居るとである。實際には一事一物皆異なつて居つて決して同一物と云ふものは此の世の中には有り得ないけれども、其の事物の個性 (Individualität) と云ふものには、吾々は此の場合に何等の興味をも有さないで總ての物は一個の類概念 (Gattungsbegriff) の中

の種 (Exemplar) としてのみ意義を有すると云ふ場合である。即ち實際に於ては等しいものでは無くつても、吾々が或一つの方面から之を觀察して等しいものを見る場合があるのであります。斯の如く對象の一つの「グループ」を檢して、其の共通なるものゝみに吾々の興味を限ると云ふことに依つて、吾々は決して世の中に同じものが二つ若くはそれ以上あると考へてはならぬけれども、此の Allgemeinbegriff (普通概念) の構成に依つて見透しのつかぬ内外界の對象の雜多を簡單にする<sup>○</sup>ことが出来る。是に依つて自然科学が可能となるものであつて、其の究極の目的は自然法則の樹立にある。斯の如くに多くのものゝ間に存する共通なるものに吾々が興味を惹起すと同時に第二の見方としては又他物と異なる所の特有性あることに依つて吾々が興味を起して行くと云ふことも亦事實である。即ち對象の各に就いて其の個性を見て行くと云ふ見方である。此の場合に吾々が最も注意しなければならぬとは Individualität と云つても其の或る一個の物を生き寫しに吾々が認識すると云ふとはなく、或一個の特別の目標が



あつて其の目標に對して重要な諸種の要素を或特別の關係狀態に集結すると云ふことに在る。而して初めて其處に一個の個性を認めると云ふことである。天地間の森羅萬象皆悉く個々のならざるはないけれども、茲に重要な個性と云ふを考ふる場合には、必ず意義といふことが附着して居ることである。即ち是が此の見方の中心點をなすといふ事である。換言すれば茲に價値の問題が這入つて來て、其の概念構成は目的論的 (teleologisch) になつて來る。是に依つて歴史は自然科学に對して一個の特別なる認識目的を有する學問として成立することを得るに至るものである。

今此の二つの見方に依つて内界生活を吾々が認識するに當つては其が第一の方法たる自然必然的普遍化概念構成に従ふか或は第二の方法たる目的論的意匠的單一化概念構成に従ふかに依つて、内界の生活は一方には自然科学の對象となつて心理學に於けるが如き場合となるか、或は他方には人文史學の對象となつて歴史生活として表はるゝかと云ふ別が生じて來る。而して經濟生活

はそれが「經濟」と稱する一個の歴史的範疇に始めから制約せらるゝの故を以て、既に其の根本に於て之を全體として考ふるときには一種の歴史生活として吾々に認識せられると私は思ふのである。而して後此の如き認識論的表面に於て更に先きに申したる二つの異つた見方に依つて觀察せられ得るのである。即ち一方は普遍的他方は單一化的概念構成が許さるべしと思ふのである。之を強めて言へば、多くの學者に反して、私は「經濟生活は論理上より之を論じて見れば、先天的に一種の歴史生活である」と信じて疑はない。其の結果として一方には今申したツキンデルバンド、リツケルトの言つた様に如何なる認識對象も之を方法的に區別すれば一は自然科学の對象となり、他は歴史科學の對象となるとの前提よりして、殊にリツケルトが其小さな書物 (Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft, 2. A. 1910.) 中に主張する様に經濟學を以て其の中間範圍 (Mittelgebiet) となし、同時に自然科学と歴史との對象と爲り得るとするに賛同することを得ない。同時に他方に於ては經濟學の對象は心理主義的 (psychologisch) に構成せ



られざるべからずとし、一切の時と處とを離れて欲望の概念から出發して、經濟行為、經濟組織の概念を構成して經濟學の對象を認識し得べしとする現在の純理經濟學の概念構成、從つて對象認識に對して探る處の自然科学的心理主義に反對するのである。(前出、カント認識論と純理經濟學參照)

以上申したやうな理由に依つて經濟生活は歴史生活の一面的解釋である。而して歴史生活が吾々の認識對象となる爲には、與へられたるものとして「(als gegeben) 全く客觀的に、其が實際にありし如く吾々が認識し得べしとする Naiver Realismus に依ることが出来ないことは、恰も外界の認識に於て此の主義を奉ずる事が出来ない」と其の軌を一にして居ると思ふ。即ち外界の認識の場合には一定の先天的條件及び原理に依つて初めて吾等の經驗として認識せられる様に歴史生活も或一定の先天的 Sollen に係はつて初めて歴史生活として認識せらるゝ。此の様に於て認識せられたる歴史生活の背後又は以上に、何物が與へられたるものとして存在するやと云ふとは、吾等の認識の限界を超えたる Ding

an sich(物如)の界につきて彼れ此れ云爲するものであつて、此處は即ち知の界に於て何等の立言をもなすことを許されぬ境地に關するものである。此の歴史生活の認識に一定の Sollen を要するといふ主義を Sinnel の用語例に從つて「歴史的觀念主義」と名づけて見れば、此の歴史的觀念主義の見地に立つて吾々が人類生活考へるときに初めて歴史生活の認識は可能であつて、さうして斯の如き歴史生活の認識をして可能ならしむる根本は、即ち先天的形式たる歴史的 Sollen である。此の Sollen に係りて歴史生活が可能なるが如くに經濟生活と云ふものは、一般的歴史的 Sollen 言葉を換へて申せば「一般的文化價值」とでも申しませうか、それは何等かの内容的の制約を許したる「經濟的文化價值」に係りて初めて可能である。即ち一般に歴史生活が文化價值に係りて可能となるが如くに經濟生活をして可能ならしむる根基は先天的形式 Sollen としての「經濟的文化價值」である。(前出、經濟學認識論の若干問題參照)

## 二



此の Sollen は諸君が既に認識論に於て御承知である如くに形式的であつて、其の特殊の認識對象の係はるべき範圍内に於ては、何等内容の制約を許さない性質のものである。勿論「經濟的文化價值」と云ふを言へば、是を「文化價值一般」に對比せしむれば、同じく形式といふても何等かの意義に於てか「經濟的」と云ふ内容の制約を許さざるを得ない。けれども之に係はつて經濟生活が認識對象として可能となると云ふ其の範圍に於て之を論ずれば、經濟的文化價值の形式的にして何等内容の制約なきは、恰も人類の歴史的文化生活一般が認識論的に可能となる根基として、缺く事を許されぬ「文化價值一般」が形式的にして何等内容の制約を許さないと同じ理窟である。其の場合にも文化價值一般が形式であると言つても矢張り其自身に於ては超歴史の絶體價值に比すれば亦「文化」と云ふ内容の制約を許さざるを得ないと同様に「經濟的文化價值」と言つても、亦「經濟的文化」といふ内容の制約から全然離るゝことは出来ない。而かも之等が共に Sollen として形式的であつて何等の内容の制約を許さないと云ふ所以は先程

から申す通り只其が先天的認識條件として、經驗素材たる人類文化生活一般又は其の一面的解釋たる經濟的文化生活に對して云ふのみである。即ち其の特殊の認識對象の係はるべき範圍内に於てのみ之を論ずれば、「經濟的文化價值」は先天的形式的條件であつて何等内容の制約を許さないと云ふのである。反之是に内容の制約を許したりと見得る例として一つのものを擧げて見れば、吾々が歴史的生活として或人類生活の經過を認識するに當つては吾々が之に對して有つて居る「興味」が之を歴史生活として觀察せしむるものであると云ふ如き場合であるが、此の場合には即ち此の Sollen に内容の制約を許さんとするものである。けれども興味、インテレスト」と云ふものは史學認識論の *das Apriori* たることが出来ないことは明かだ、或事件に興味があると言つても、それが詩や歌、若くは小説と別たれて歴史生活として認識せられる爲には、其の事が「事實」であると云ふことが必要である。けれども事實であると云ふのみが歴史生活を構成せしめないと云ふことは、即ち毎日起る所の新聞の記事に表はれる事實が



直に歴史生活でないといふ事によつて明かである。即ち之に加ふるに其の事實が歴史的に重要でなければならぬと云ふ風に直にそこに價值判斷が結び付いて來らざるを得ない。エドワルド・マイヤーが歴史生活は *Wirksein* でなければならぬと云ふ事をいふて居るが *Wirksein* と云ふ字は此の場合には上述の如き意味を有つて居るものと解釋して宜しいものである。さうすると事實上重要な爲に興味があると云ふことになれば直ぐに其の事實が何に對して重要であるかと云ふ問を起さざるを得ずして茲に目的論的の考察を許さねばならなくなる。さうすれば結局は文化價值といふ *Sollen* の樹立に終らねばならなくなるといふ結果に陥るのである。要するに其の *Sollen* に特定の内容を入れて考ふるときは今言つた通りそれからそれと必ず尙夫れ以上に之を制約するものあることを要するから其の究極に押し詰めて行くと、其の特定の範圍に於ける認識の先天的條件たる *Sollen* としては常に必ず形式的に終つて何等内容的制約を許さないと云ふことにならなければならぬ。

## 三

此の *Sollen* に係はつて認識對象は初めて可能となるものであるが、此の場合に考ふべきことは、認識對象が此の *Sollen* に對して考へらるゝときに二つの異なる説があることである。

其の一つは先程から申したるリツケルトの言ふ所であつて、經驗科學に於ては實際上事物の價值とか、或は價值のない……不價值であるとか云ふことにつき普遍的妥當なるやうに何等の立言をもなし得ないから、對象と價值とを結び付けて尙且其の客觀性を失はざらしめん爲には、實際上の價值判斷と異なる一種の「價值を結び付けること」(*Wertverbindung*) がなければならぬ。即ち單純に或る價值に對して特定の認識對象が何等かの意義、重要を有するや否やと云ふことを見るが爲めに其の價值に *Beziehen* すると云ふと即ち *Theoretische Wertbeziehung*、理論的に價值に係はらしむること、其の認識對象が或特定の積極的若くは消極的價值を有するや否やを見て價值判斷を下す *Praktische Wertung*、實際的價值判



斷を下すと云ふこと、此の二つのものは分たれるものであり、又分たれ得ざるべからずと主張するのである。即ち一方に於て價值に *beziehen* すると云ふこと、他方に於て積極的消極的に價值を判斷すると云ふことは分ち得べく又分たれざるべからずとリツケルトは言ふのであるが、他方に於てはリール (Rehl) は *Werthen* 即ち價值判斷をするをなくしては價值に *beziehen* することは出来ない主張するのである。是に就てはリツケルトは非常に辯駁に努めて居ります。が、此の兩先生の説を私かに考へて見ると云ふと、或は論理上の可能と、心理上の可能とを混同して居るものではないかと私には思はるゝのである。即ち論理上には *theoretische Wertbeziehung* と *praktische Wertung* とは別つことが出来るものであつてさうして心理上には此の兩者の分離は不可能ではないかと思ふのである。換言すれば論理上から言つて唯一一つの事實に對して二つの方面から觀察することを許し得べしと云ふのではないかと思ふのである。若し此の分離が論理上出来得るものであるとすれば、此の兩方面から觀察して見ると、第一の

理論上價值に係はらしめると云ふ方面は即ち認識の可能其自身に關するものであつて、第二の實際上の價值判斷と云ふことは即ち認識成果の價值に關するものである。之を先程から言ふた歴史生活に例を取つて申せば *Sollen* たる一般的文化價值に係はつて歴史生活其自らが認識論上に可能となり、此の一般的文化價值に照らし合はされて價值判斷のある處に認識成果たる歴史生活の價值が批判せられて茲に政策の根基が構はるのである。若し此の人類歴史生活に對する政策を呼ぶに最も廣い意味に於て社會政策の名を以てし得べくんば、即ち社會政策は此の實際上の價值判斷に依つて初めて可能となるものである。即ち社會政策の根基は此の如き先天的形式に係はつて初めて可能となりたる歴史生活の實際的價值判斷に存すると言つて宜しいのである。さうすると此の一般的文化價值と云ふ先天的規範であり、形式であり、*Form* である所のものは、其の之を可能ならしむる總ての根基であつて、歴史生活は要するに此の一般的文化價值を内容的に實現せんとする過程の一切であり、社會政策は斯の如き文



化價值の内容的實現に對する意識的故意的努力であると言つて宜しいと思ふのである。さうして此の意味に於て歴史生活及び社會政策の歸趣としての究極點は即ち一般的文化價值なる先天的規範の内容的實現を自身であると言ふべきである。茲に理想が湧き不斷の努力が起り人生の悠久がある。而して斯の如くあらしむるものは偏に一般的文化價值が先天的形式であつて何等の内容的制約を許さぬと云ふ場合に於てのみ意義があるのである。

此の場合に近來最も進歩したる社會政策の論者が説く所の所謂生存權と云ふものを以て——我國に於ては近時福田博士が盛んに唱道せられて居りまするが——社會政策の *raison d'être* としての内容を説くものと解釋し得るとすれば、明かに此の先天的條件に内容的制約を許さんとするものであつて私は反對せざるを得ない。生存權の根基は總ての人に其の生存の權を與へんとするものであつて、其の特定の人が社會に對する必要の程度又は如何なる生活をなして居るか、と云ふ其の生存の意味如何に準じて其の生存權の與奪を計らんとするも

のではないのである。即ち唯生存して居ると云ふ事實のみに依つて、其の者に生存權を與へんとするものである。併ながら竊に私が考へるのに單純に人が此の世に生れたりと云ふ自然經過に依つて一の權利をも取得し得るものではないと思ふのである。即ち *sein* から *sein* を導き得べしとの論理上の連鎖はあり得ないと私は思ふのである。故に生存權を立證せんとすれば——是は福田博士も仰しやつて居ることであるけれども——此の如き社會權を與へること、其の事が社會の生存に取つて必要であると云ふこと、恰も財産權とか相続權とか云ふものを保つことが即ち社會に取つて必要であると云ふより外に理由はないと同様である。さうすれば一步進めて考へれば、若し此の如き社會權を與へない方が却つて社會に取つて必要であると云ふ反對の理由が出て來れば、生存權を認むるの根據も亦其の時は直ちに消滅してしまはなければならぬ。さうすると云ふと社會政策の *Sollen* と云ふものは、此の場合には實は生存權其のものではなくして、社會生存の必要と云ふことに *beginnt* に移つて行くので



ある。さうすれば更に進んで我々は又何に對して社會生存の必要があるかと云ふ問ひを起すを得ない。さう云ふ風に段々推し詰めて考へて見れば結局後天的經驗的内容的制約を許さざる先天的形式規範としての一般的文化價值と云ふものが存在しなければならぬと思ふのである。昨日來本會の大會に於ていろく有益な御講演がございまして「社會政策上より觀たる税制問題」とか或は「社會政策と個人」とか云ふやうに、いろく「社會政策」と云ふ文字が使つてありますが、各論者は皆それに一定の何等かの内容を付せられて居る如く私には思はれましたけれども、今斯の如く論じて來つた論法を用ゐて参りますれば、矢張り此の「社會政策」といふ文字の意味も段々問ひ詰めて行くと、結局其の歸趣が Sollen として考へらるゝ場合には總て先天的形式として何等内容的制約を許さない場合に於てのみ意義があると私は思ふのであります。

又此の事をもう一つ例を取つて説明して見ると、historischer Materialismus であるが、此の主義に於ては Das kommunistische Manifest に於て言ふた如くに、總て歴史

の経過を階級闘争 (Klassenkampf) の歴史と見てさうして現今の闘争は經濟財に關するものなるが故に Bourgeoisie に對する Proletariat の勝利を以て絶對價値の内容を示すものとしたのである。然れども之に對しても亦吾々は「何故に」と云ふ問を起すことが出来るのである。さうすると其の答には、唯、現今の社會に於て階級闘争と云ふのは、經濟的闘争であるから Bourgeoisie に對する Proletariat の勝利が絶對價値であると云ふより外に仕方ない。けれども歴史は常に新しい内容を以て充實して行くから到底歴史的概念なる第四階級の第三階級に對する勝利が價値の内容であると云ふことは永久に亘つて言ふことは出来ない。之を一般的に云へば歴史上の或一つの階級と他の階級との闘争に於ける勝利と云ふことが價値の内容たることを得ないと云ふことは明かであると思ふのである。斯の如き闘争に依つて實現し得べき價値は所謂闘争の爲の闘争と云ふことに何等の意義があり得ない以上、其の闘争上の勝利と云ふと其自身たり得ないことは明かである。即ち私に言はすれば、一階級の闘争上の勝利に依つて何



等かの實現し得べき價值は別に其の鬭争の上に超越して存在しなければならぬといふことは論を俟たないと思ふのである。さう云ふ風に論ずると云ふと如何なる内容も普遍的妥當たり得ないから、畢竟價值は何等の内容的制約を許さない所の形式としてのみ存在し得べしと云ふ結論になるのである。

斯の如く何等の内容的制約を許さない先天的條件規範としての文化價值は歴史的生活を認識論的に可能ならしめ、政策に根基を與へ且其の兩者の歸趣を示すものである。

## 四

今まで申した事は其の儘之を經濟生活の認識論と哲學とに移し得べきものである。即ち經濟生活は經濟的文化價值に係りて初めて認識論的に可能となり、之に照合せられて實際的價值判断が行はるゝにより經濟政策の根基が與へらるゝのである。之を價值實現といふ方面から觀察して見れば經濟生活と云ふのは經濟的文化價值たる形式規範の内容的實現の過程であつて、此の規範實

現の過程に或特定の方向を與へ、或特定の結果を生せしめんとする要求に對應する意識的努力を稱して經濟政策と謂ふのである。獨逸の學者並に之に倣ふ日本の學者の多くが經濟政策を目して國家の公法的施設のみに限らんとするは、只一面の眞理を語るものに過ぎずして其の全般を盡したるものと私には思へないのである。然らば經濟生活及び經濟政策の歸趣としての究極の安穩點は何であるかと言へば、即ち經濟的文化價值なる規範が客觀的普遍的妥當性を具有する内容によつて實現せらるゝ事其自身である。即ち經濟生活及び經濟政策の歸趣は之を繰返へして申せば、規範實現の内容が客觀的普遍的妥當性を有すべしとし又有する所である。勿論吾々人類の歴史生活を翻つて考へて見、さうして之を規範實現の過程として考へて見ると、凡て階段的に完成せられて行くのであるから、其の内容が其の都度普遍的客觀的妥當なることを得ないから之によつて永久に其の過程が進行して行くのである。而も其の究極に於て規範實現の内容が客觀的普遍的妥當性を具有すべしとする謂は、形而上學



的要求と信念とがあつて初めて規範實現の全過程に意義あり得るに至るものである。此の規範の内容が普遍的妥當性を具有すべしといふ要求は、規範自身に既に吾等に必然的に起らざるを得ざる而かも到底解明することを得た問題であると云ふ意義と同じく、カントの用語例に従へば、即ち一個の *Idee* であり、一個の *regulatives Prinzip* 即ち統制的又は整理的原理と稱すべきものである。爰に規範の内容として認識の對象を得んとすることは、既に諸君が認識論に於て御承知のことであるが、認識論上絶対的不可能のことである。故に其の性質上普遍的妥當性を得能はざる所の内容を以て規範の認識對象となさんとする試は古往今來其の跡を絶つことがないにも拘らず總て皆失敗の歴史を残すのみである。例へば倫理學上の權力説とか、快樂説とか云ふものは、總て普遍的妥當たり得ない所の内容を以て *Sollen* の内容となさんとする所の學説であり又認識論上の *Pragmatismus* の如く凡て人生に有用なる知識を稱して真理であると云ふ如き皆同様の試みであつて私には總て失敗の歴史であると思はるゝので

ある。上述の規範の内容が普遍的妥當性を有すべしとするは規範それ自身と同様、一個の整理的、統制的原理なりと解する場合に於てのみ意義があるのである。併しながら普遍的妥當性を有すべき内容の實現を規範に求むる處の、申さば形而上學的超認識論的信念あつて初めて人生の悠久に意義があり、政策に根基が與へらるゝものである。

斯の如く經濟政策の歸趣を釋ぬる上に於て、經濟生活の意義、目的を經濟的文化價值なる規範の内容的實現に求め而かも其の過程の究極に於て規範實現の内容に客觀的、普遍的妥當性を要求する此の思想の中に果して形而上學的考察を許さずして止み得るかと云ふとは誠に一個の疑問である。吾等は此の場合に經濟生活が經濟的文化價值に係りて、謂はゞ外からくッ付いて接觸して認識論的に可能となると云ふに止まらないで、進むで何等かの意義に於て價值實現の歸趣と云ふ方面から觀察して吾々の經驗的經濟生活と超經驗的經濟的文化價值との間に本質的の結合なきを得るや否やと云ふとを問ふことなくして



止み得るか。即ち茲處に Sein と Sollen との結合といふ吾等の經驗を超越したる一個の難問を提起せずして止み得るか。超經驗的實在を主張する形而上學を排して茲に一百年認識の對象として絶對的に不可能でありながら、尙且一種の實在として所謂 „ein Sein des Sollens“ と云ふやうなものを考ふることなくして止み得るか。是等は即ち若し建設し得べくんば當に經濟哲學の最終の問題を形成するものであり爰に經濟哲學の究極の問題は横はると私は思ふ。

經濟政策の歸趣は正に其の解明を此の「經濟哲學の問題」の中に求めなければならぬ。即ち超經驗的實在を第一次的實在として此の經驗界の背後に求むる形而上學の許すべからざることを吾々は知りながら、尙且經濟的文化價値の内容實現に一切の時處を超えたる無制約的、普遍的、客觀的妥當性を思はざるを得ざる處に經濟政策は其の根據と歸趣とを有するのである。茲にカントと共に文化生活に客觀的意義を與ふるものとして且此の世界と其の歴史の意義、目的を示すものとして自由 (Freiheit) を擧ぐることを得べきや否やは又經濟哲學が

其自身の問題とする所でなければならぬ。

斯の如くして經濟哲學は經濟學認識論として經濟生活に對して重要あるのみならず、又之に依りて認識論的に可能ならしめられたる經濟それ自らの歸趣を示すべきものとして、且其の歸趣を解明すべき任務を有するものとして意義を有するのである。而して經濟生活の意義、歸趣を繹ぬる處に經濟哲學は其の最終の問題を有して居る。此の經濟哲學の究極の問題定まつて初めて吾等は社會政策を語るべく經濟政策を談すべし。

此の經濟生活、經濟政策の歸趣たる Sollen の境地が詩人シルレルの有名なる

Das Ideal und das Leben に歌ふた如くに

...in den heitern Regionen,

Wo die reinen Formen wohnen,

Rauscht des Jammers trüber Sturm nicht mehr.

Hier darf Schmerz die Seele nicht durchschneiden,

Keine Thräne fließt hier mehr dem Leiden,

經濟政策の歸趣



Nur des Geistes tapferer Gegenwehr.  
Lieblich, wie der Iris Farbenfeuer  
Auf der Donnerwolke duff'gem Tau,  
Schimmert durch der Wehmut düstern Schleier  
Hier der Ruhe heitres Blau.

諸君、茲に heitres Blau が schimmern せるや否や、それは私は知らない。

私の今日の講演の目的は、茲に殆んど解明し得ざる經濟哲學上の難問が横はつて居ると云ふことを諸君に指示すに過ぎない。豈復た何ぞ敢て他を言はんやである。甚だ抽象的のことばかり申して御聴き苦しい所があつたと思ひます。(拍手)

### 無 題

(大正五年十月十五日發行第三帝國所載)

現代文明の趨向を察し、其の歸趣を悟るは、凡ての縉世家、凡ての學者の究極の責務とする所でなければならぬ。鎔鉄の利を争ひ、蓄財に他意なき商賈の身より、進むでは小なる試験管内にも森羅萬象の興趣を悟る自然科學者、さては天地萬有の悠久な一枚の花に探り得る宗教家に至るまで、其の各々の努力が無意義に終らざることを知り得る爲には、吾等が有し而して將來有すべき人文の發展は、如何なる方向をとり、如何なる歸着點を有するやを究むること深からざるを得ない。

實際に於て彼等に向つて何の爲めの奮勵ぞ努力ぞと問ふの必要はない。彼等は答へて云ふかも知れぬ、平衡を得たる天秤の上に假令輕微なりとも一物を投ぜよ、傾くであらう、吾等は唯其の此の如き傾に従ふのみである。されども軌より出づる雲の如く無心なれと教へて、世の衆生を濟度せんとする大智識の言も、其の究極に於ては最も深き意味に於て何の爲め、無心なるやを思ふことななくしては、唯だ一場の囁語に過ぎなくなる。恰も學術の爲めの學術、美術の爲め



の美術なる語に深き意味あるを悟り得る者は、一見無意義に等しき此等の成語にも尙其の言葉の裏に又根柢に何人に依りても動かすことを得ざる大前提あることを承認するもののみに限らるゝと同じである。商賈の奮勵も、自然科學者の探究も、宗教家の努力も、畢竟何等かの意味に於て吾等の文明に貢獻する所あり、吾等が有する人文發展の歸趣に寄與する所ありとの深き自覺の上に立つに非るよりは、其の一言一行大に有心なるにも拘はらず、却て雲の無心なるに等しい。期せずして大智識の教に合ふとも吾等は此の有心の無心に何物をも發見し得ない。刹那刹那に此の生を享くるを以て人生の要道なりとする者も、其の此の如きを以て眞善美に與るとするに於てのみ意義ありとする論理を避くるを得ない。

勿論吾等の努力は常に忠君愛國の至情に依つてのみ、又は吾等が有する文化進展に貢獻する所あるべしとの道義心によつてのみ左右せらるゝとするには餘りに其の基く複雑である。自然主義、刹那主義、牛獸主義、享樂主義を稱へて、何等かの爲めの人生を強ふる偽善家的道學者先生の言に抗するは其の消極的意味に於てすれば則ち可、而かも自ら思ふ所にして眞善美の價値に無關心なりと

するは、誤て論理の峻嚴なるに目を閉づる者である。吾等が有する人文發展の歸趣に係はりて自らの主張に價値を見出すとするに於てのみ吾等は其の説を是非論難し得る。

此の如き意義に於て、文學、美術、學問、法制、政治、經濟等百般の文化的所産は、吾等が營みつゝある社會的、人文生活の趨向を思ひ、其の歸趣を尋ね得る者にのみ其の意味を悟らしむる。而して其の此の如き意味を悟るは、正に凡ての經世家、凡ての學者の義務でなければならぬ。世の内治外交を論じて時の内閣の政策を論議するに専らなる政治家、十八世紀以降民主主義の勃興を論じて勞働問題の趨勢を語る社會政策論者、研究室裡十九世紀に發達したる自然科學の結果を遺憾なく適用して、細を穿ち微を發いて天地萬有の相續を究めんとする自然科學者、其の各々の尊むべき或は卑むべき努力が、假令隨所吾好的傾向以外何物にも基く者なしとするも、其の努力の價値を何等かの意義に於て人に求むるときは、其の瞬間に於て人類文明の趨向を考察することに到底無關心なるを許さぬ。此くして初めて凡ゆる人々の凡ゆる努力に對して、夫々に正當の判斷を下し得るのである。人生憂患の初めを以て字を知るにありとすれば、人生憂患の終り



經濟哲學の問題

第一編 經濟哲學研究  
は正に這般の判斷を下し得るに至て止むと云はねばならぬ。(五、九、卅)  
一五二



大正五年八月發行  
哲學研究第五號所載同題文訂正

## 五 經濟哲學の問題

カントの包括的且自然科学的なる自然概念 (Naturbegriff) (1) の構成を傳統的に繼承して、リールが科學的方法の統一を主張するに對し、(2) 他くまでリッケルトがウキンデルバンドの小論文(3)より發足して、科學の方法論を決定し、之を二元主義に導きたるは、今や學界に周知の事實である。(4) 而して此の二の異なる論議の認識論上の深き根基を、リッケルトは因果律 (Kausalität) と自然法則 (Naturgesetz) とに峻別して、前者は認識全般の一構成的範疇 (eine konstitutive Kategorie) たるが故に、他の範疇と共に所與 (das Gegebene) に「客觀的現實態」(objektive Wirklichkeit) なる一の特定なる概念の形式を與へ此くして之を構成し、之を可能ならしむるものであるけれども、後者は單純に方法論的形式 (methodologische Form) に過ぎざるが故に、客觀的現實態其自身の構成に與らずして、唯だ其の見方、考へ方 (Auffassung) を定むるものであるとするに反して、(5) リール等の主張は論理上



所与 = Das gegebene

此の兩者を區別せずして、共に認識の構成的範疇なりとすること、カントが其の當時の學術の状態より見て科學即自然科學なりとして、リッケルトが自然科學のみの前提なりとする自然法則を以て直に客觀的現實態の範疇としたるに<sup>(6)</sup>倣へるものゝ如くである。余は大體に於てリッケルトの結論に贊同の意を表すものであるが、併し之を立證する爲めに論せられたる上述の認識論上の根基及び其の之より生ずる當然の歸結に對しては考ふべき點少からずと思ふ。

- (1) Kant, Prolegomena. I. A. 1783. S. 71
- (2) Die Kultur der Gegenwart (Herausgegeben von P. Hinneberg.) Bd. I. Abt. VI. S. 86.
- (3) Windelband, Geschichte und Naturwissenschaft. 1894.
- (4) Rickert, Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung. 2. A. 1913. Rickert, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft. 2. A. 1910.  
邦文にては例へば西田博士著「思想と體驗」百二十一頁以下
- (5) Rickert, Der Gegenstand der Erkenntnis. 2. A. 1904. S. 212 ff.
- (6) Kant, Kritik der reinen Vernunft. 1781, 1787.

因果律と自然法則とを認識の成立上に於て峻別する所ある爲めに、リッケルト

は前者に對しては認識主體として「判断意識一般」(das urteilende Bewusstsein überhaupt)を立し不許不<sup>ちよぬ</sup>(Sollen)の形式としての構成的規範(die konstitutiven Normen)に應對せしめたるに反して、後者(自然法則)は單純に經驗的認識主體(das empirische erkennende Subjekt)の認識又は見方の形式(Erkennnisform oder Auffassungsform)と見るに至つたのである。其の結果「史學は自然科學と并行的立脚地に立つて、科學としての位置を與へらるゝを得るに至つたのは、誠に巧妙の論議と云ふべきである。併し方法論上科學の二元主義を主張し得る根據は或は余が從來二三の機會に於て述べた様に、認識對象其自身に於て合理的なるものと不合理的なるものとが終極に於て分離せられざるべからずと云ふ吾等が認識機關の約束に依るものに非るなきか。カントも「純粹理性批判」(I. A. S. 734)に「*トロンクメンナ*」(I. A. S. 72.)にも述べた様に、「吾等の認識に於て二の相互に歸一することを得ざるものゝ存在するを認めざるべからざる點より逆行して科學的知識に二元主義の成立するを見るは、吾等の認識にとりて避くべからざる論理的構造には非ざ



Das gegebene  
Naturbegriff  
自然概念

るなきかを疑ふのである。

(7) 拙著 Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze. 1911. S. 23 ff.

前出經濟學認識論の若干問題

此の點は暫く措いて茲處には論せずとするも、カントは Das Gegebene より直に Naturbegriff に移りたるに反して、リッケルトは其の中間に於て一の概念を挿入して、自然科学及び歴史の二元的な方法論上の認識形式に攝取せらるゝ前段に於て、諸種の構成的範疇によつて形成せらるゝ客觀的現實體 (objektive Wirklichkeit) を見なければならぬと論じ、各々の科學上の知識は其の認識素材たる客觀的現實體を科學的に修整 (bearbeiten) することによつて成立すると云ふ。此の論によつて physisch und psychisch の對立も亦構成的範疇の成果には非ずして、概念構成の成果なりと見なければならぬ。此の如くして方法論は、其自身に他のものと交渉なく成立せる客觀的現實體を、概念構成の材料として取扱ふ所の極めて經驗的實在論的根據の上に立つものとなつて來る。勿論リッケルトは此の場合に於ても、

彼の主張する超越的觀念論の立場より諸科學的知識の客觀性を立證し得べき根據を論ずることを忘れはしない。従つて科學的概念構成の形式は超越的規範を認識 (erkennen) することによつて確立せらるゝとし、且此の如き概念構成の規範其自身は凡ゆる人間的、凡ゆる經驗的又は有限的の認識主體に對して超越的に妥當なりと主張するが故に、此の意味に於て方法學は亦規範學若しくは價值學と呼ばれるべきものとなる。

乍併茲處に吾等が考へざるべからざることは、科學的認識の成立に關して Dinglichkeit, Kausalprinzip の如き構成的範疇と, Gesetzmässigkeit, historischer Kulturwert の如き方法論的形式とを分ち、後者を第二次的となし、之を以て假令心理的經驗論に於て云ふ如き認識主體に對せしめざるも、尙判斷意識一般に對峙せしめざる爲め、自然科学的概念としての自然もカントの考へたるよりは一層經驗的主觀の要素を含有するに至つたのである。即ち方法論的形式は他の論者の場合よりも一層經驗的なる認識主體の考へ方又は概念形式 Auffassungs- oder Begriffs-



Form なりとしたる點に在る。従つてリツケルトの説にして眞なりとし、其の二元的規範たる自然法則性と歴史的文化價值とに係はりて各其の概念を得、之に依りて各學は學として其の獨立の存在を得べしとするも、氏の説によりては各學の成立は二元的的方法論的形式の孰れかに又は其の學の各部に於て双方に與ることを得ば足れりと論せらるべきであつて、之に反して各學は必ず、唯、其の、一にのみ與からざるべからずと云ふ結論は之を導くことを得ない。換言すれば各科學が科學的知識の體系たるが爲めには其の何れかの認識目的に必ず係はらしめざるべからざるも、而かも其の認識目的の一を有するも可、又二を併せ有するも可なりと云ふ結論に達するのであつて、各科學は其の認識目的として必ず其の一のみを有せざるべからずと云ふ議論は出て來ない。是方法論的形式を以て認識の構成的範疇なりとせずして、之に第二次的の地位を與へたるより來る當然の歸結である。實際に於てリツケルトは力學、物理學に對峙せしめて、歴史を擧げて其の異なる認識目的を有する學問として、其の兩極端に於て相互

の獨立を主張するの他面に於ては、此の兩學の過渡的の中間範圍 (Mittelgebiet) (8) として生物學、經濟學等を擧げて居る。即ち前者の對峙に於て各認識目的の一が方法論的規範として認識主體の識認を要求し、之によりて各自より分つ獨立の學的知識が形成せらるゝものであるが、後者の中間範圍に屬するものにあつては、其の各部の知識は必ず其の認識目的の何れかに與る所あつて形成せられたりとするも、其の此の如く異なりたる認識目的を有する知識の雜然たる集團を稱して、或は生物學或は經濟學と云ふのであると主張する。恰も數種の異なりたる酒を一瓶中に混成して、其の外部に「コックテール」と云ふ Etikett を貼付するに等しいものと見て居る、余は此の點に對して疑なきを得ない。

(8) Rickert, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft, 2. A. 1910, S. 106 ff.

凡そ一個の學問が學としての獨立の存在を保有し得るが爲めには、其の認識目的は吾等の認識成果を形成するに於て、飽くまで構成的範疇の形式を通じて表彰せられて來なければならぬ。勿論此の場合に於て方法論的形式の名を



冠らしめんとすることは單純なる命名の問題であつて重要なことではない。併乍只此の名を冠らしむることに依つて、其の構成的範疇としての性質を否定せんとすることには、余は其の可なる所以を知らない。リッケルトの主張によりて見ても、例へば因果律の範疇のみによりて形成せられたる客觀的現實體は、實在するものには非ずして、只一個の形式概念たる抽象的思索の產物に過ぎないから、吾等の認識の成果としては更に此の上に方法論的形式の存在を要するとするのである。即ち吾等の認識の成果には、氏の所謂構成的範疇と方法論的形式との併存を要すると見るのである。只構成的範疇によつて形成せられたる客觀的現實體を認識素材として科學的知識を生成せしめん爲には方法論的形式の一に與らしむるを要し、其の認識主體は構成的範疇に對するものよりも更に經驗的なり得とすると前に述べた通りである。余は之に對して認識成果成生の階段を二に分ち、其の前段に於て構成的範疇によつて客觀的現實體を得る認識主體は判斷意識一般にして、後段に於て方法論的形式によつて科學的知

識を得るものは經驗的認識主體たり得とする理由を解するに苦しむのである。

此の場合にリッケルトは曰ふ、前者の判斷意識一般は客觀的現實體の形式に關しては *Ideal* であり、内容に關してはカントの意味に於ける *Idee* である。其の實現の可能に關しては、如何なる個々の認識主體にても之に近づくことすら不可能と云はねばならぬ、何となれば科學的知識は直觀 (*Anschauung*) に非ずして概念を作るに在るが故に、此の概念の内容は決して客觀的現實體の直觀的内容と一致するものに非ずして、此の内容は全體としてのみならず又其の各部分に於ても、如何なる概念にも、それが存在する如く凡てを攝取せしめざる特性を有するものなるによる、即ち認識は常に概念によつて客觀的現實體の内容を改造 (*umformen*) するものである。此の如く科學的概念構成の場合に考へらるべき形式は、客觀的現實體の概念を抑も最も初めに可能ならしむることに與るものに非ざるが、さりとて又經驗的實在論の立場より見て謂ふ所の認識材料の中にも包含せらるゝものではなく、唯客觀的現實體の見方、考へ方を決定するものである。



此の故に構成的範疇と同列に論せらるべきものでもなく、従つて判断意識一般に關係せしめらるべきものでもない。(9)

(9) Rickert, Der Gegenstand, S. 206-7.

併し此の論に於て謂ふ所の客觀的現實體は論者の範疇一般就中 Kategorie der Gegebenheit, Dinghaftigkeit, Kausalität 等の構成的範疇を経て生じたるものとして見て、其の場合に尙且科學的認識の場合と異なる様に取扱はるゝとは至當であるか、即ち客觀的現實體は諸種の範疇により確立せられても尙概念的とならずして、直觀的に止まり得とする如き論法は至當であるか。假りに此の點を許すとしても此の客觀的現實體を科學的認識成果とならしむる爲めに茲に拉し來つた方法論的形式の何れかに従はしむることが個々の經驗的認識主體の任なりと云ふとも、既に概念構成の規範其自身は凡ゆる有限的認識主體に對して超越的妥當性を要求すべきものなりとすれば、此の場合の認識が其の性質上果して客觀的現實體の成立と如何程迄異なるべからざるべからざるか。従つて其の認識主

體を更に一層經驗的なるものとするのが至當であるかと云ふとも問題となる。凡て之等の主張をなすに至つた根本は或は方法論的形式の二が互に相反撥して獨立せるによりて、若し之を構成的範疇として論せんとすれば、此の如く互に相排する二の範疇なるにも不拘、共に同時に係はらしめざるべからざる如き構成的のものなりと認めざるを得ずとなしたるによるか、又は其の兩者が構成的範疇として併立したる場合には認識成果が精確なる科學的認識又は不精確なる科學前期認識たり得る爲には、其の二範疇の何れか一を撰ぶことを要するに至るものであるが、其の撰擇の理由は何處にあるか、之は到底發見することを得ぬと見たるに非ざるなきかと余は疑ふのである。乍併こは範疇論一般の問題に於て既に解決せられたる問題であつて、特に茲處に關說するもののみ特有なるものではない。余はリツケルトが客觀的現實體は唯一のみなるが故に、之に對して構成的なるものは凡ての科學に妥當なるべくして數種の方法なるものあり得べからずと論するけれども (Rickert, Der Gegenstand, S. 224) 同じく構成



的範疇であつても相互に反撥して獨立するものゝ存在し得ぬ理由はあり得ないこと、假令種々の點に於て幾多の異論はありとしても、カントの範疇論の辨證論的構造に於て見ても其の可能は明かであると思ふ。之と同時に唯其の一を撰擇して認識の成果を齎すべき窮極の原因は、前に述べた様に余は吾等の認識其自身の論理的構造に求めざるを得ぬと思ふ。而して實に茲處に其の理由を求め得ることによつて、初めて科學的認識の二元主義は立せられ得べきものと信じて居る。即ち如何なる點から見ても、リッケルトが科學的認識の二元主義を立つる根據を、方法論的形式が單純なる經驗的認識主體の *Aufassungsform* なりとする點に求め、従つて此くして生じたる二元的認識成果の混成體を目して、尙一獨立學なりとする意見には、余は飽く迄賛同することを得ない。若し余が上來記述したる如く構成的範疇と方法論的形式との區別を排して共に之を構成的範疇なりと見るときは、假令認識成果は二元的となるも或一學が他學と分離して獨立の存在を保つが爲には、其の學の認識目的は必ず此の二範疇の一に與

る所なからざるべからずと云ふ結論を生じて來るのである。既に其の一の認識目的に係はらしめて一學が獨立して存在し、其の學に特有なる認識對象を得たる場合には、其の認識論的表面に於ては異なる數種の *Aufassungsformen* を許すべし、而かも其の形式の素材としての其の學の認識對象は、必ず認識目的の二元的なるものゝ唯だ一にのみ係はる所あるを要すと云ふべきである。

以上は認識の生成と云ふ方面から觀察したる論であるけれども、認識成果と云ふ方面から見ても同様に論じられる。即ちリッケルトは或る一獨立學の概念が相反する二個の認識目的に係はらしめて各自成立せしめられ、此の如くして成立したる異なる認識目的を包括する諸概念的知識によりて成れる一學全體は一個の混成體たり得と説くけれども、余の思ふ所によれば一獨立學が一の確定したる且獨立したる認識目的を有することなくして存在し得と論ずるの論理の矛盾たるを免れない。認識目的其自身に一種の混成體を考ふることは論理上全然不可能である。若し一學が論理上に獨立したるものとしてカン



トが自然科學に對して爲したる意味に於て *Begründen* せんとするならば、其の學に特有なる認識目的を立證しなければならぬ。然らずんば一の學問は獨立したる學として見られ得ぬと云はねばならぬ。即ち一學が獨立して存在し得る根據としての認識目的其自身には如何なる意味に於ても混成體を認むることが論理上矛盾なりとの方面から見ても、各學は一の獨立學としては唯一の認識目的を有すべしと云はねばならぬ。即ち余はリツケルトに反して若くは或意味に於て之より進むで、各學は二元的認識規範の何れかに係はらしめられて初めて可能となるに止まらず、各學は論理上一個の獨立の學としての存在を保つが爲には、唯其の一にのみ係はらしめられざるべからずと主張したい。

此の如く各學は二元的認識目的の唯だ一にのみ係らしめて獨立を保有せしめらるゝと云ふ時は各學は、自然科學及び歴史の二の何れかに屬せしめられざるべからざると同時に、或は結極此の二認識目的を理想的に表現する只二個の學問とのみなつてしまふに至ると論せらるゝ恐があるかも知れない。併し余は

此の二學の夫々の範圍内に於て種々の學問が成立するの事實を非認しないのみならず、又之を以て混成學と見做す如き論理の矛盾を許さずして、尙且此の數種の學問の成立し得べき論理上の根據があり得ると思ふ。夫は各學の全部を通じて究極の認識目的は二に歸收せらるゝけれども、凡そ認識素材を何等かの意義に於ける概念に依つて改造せられたる知識の統一的體系が學問なりと云ふ其の學問本然の性質に顧みては、各特殊科學は一定の認識目的に對應したる其の學特有の對象を有すべきである。換言すれば各特殊科學はそが法則科學たると事實科學に屬するとを問はず、凡て其の範圍内に於て獨立の認識目的を有すとせらるゝ以上は其の認識目的を異なる程度及び異なる性質に於て内容的に制約せらるゝことによりてのみ一途に究極の二認識目的に歸納せらるゝことを避け得るものである。即ち究極に於て二に歸收せらるゝ認識目的は各其の範圍内に於て特異の内容的制約を受けて之によりて特異の認識目的が規範として認識主體に對するによりて各特殊の經驗科學が可能となるに至るの



である。例へば力學、物理學、化學の夫々の認識目的には何等かの意義に於て夫一定の特異の内容的制約を許すに依つて、各學が獨立の學として存在するを得るのである。故に「エレクトロンの學説は此の各學を通じて決して究極的法則科學的認識目的には何等の變改を及ぼさずとも、其の之を制約する内容的要素に大なる變動を起さんとしつゝあると云ふ意義に於て此等の特殊科學に大なる重要があるのみならず、又方法論上看過することを許されぬのである。歴史に屬する學問に於ても亦同様である。文學史、政治史、經濟史等の各歴史の認識目的が夫々の範圍内に於て各特異の内容的制約を受け依つて以て各學が獨立するを得るのである。此等が又一般人文史と異なれりとするも畢竟は認識目的の内容的制約の相違に其の論理上の根據がある。即ち余は凡ての學問は二の認識目的の必ず唯其の一をのみ有せざるべからざるのみならず、其の各範圍内に於て更に獨立の學問的地位を有するが爲めには、論理上特異の内容的制約を許したる認識目的を有せざるべからずと主張したい。

茲處に認識論の最も深き問題は横はる。所謂認識論の二途より發足して一形式は内容的制約を或意味に於て許し、又或他の意味に於ては之を許さずとの結論に達する。之を形容的に云ひ表はせば、下より形式を仰ぐ超越的心理學的方法に依れば、形式は其の範圍内に於て經驗内容の其の何れをも全き意味に於て攝取するを許さず、其の凡ての内容を統一に導くものであるが故に何等の内容的制約を許さぬと云はねばならぬ。之に反して上より形式を俯瞰する超越的論理學的方法によれば、其の形式が一個の形式全體の體系の中にあつて、其の全體の整正を保つ一員として、他の形式と區別して各其の處に其の特殊の意義を有するが爲には、何等かの意義に於て内容的制約を許し、形式の各々が相互に關聯して一個の階段をなすと云はねばならぬ。此の二の見方を相背反せしめずして統一に導き、俯仰して一律の解釋を許さしめ、而して無窮に連續せる一體として、之を體得せんとする慾求を指して、味ある哉言や、形而上學的慾望と云ふ。而も之に應せんとして立せられたる何等かの意義に於ける形而上學の許



すべからざるは、既に吾等の熟知する所である。茲に永遠の哲學的追求がある。我が經濟學の學問上の地位は何なりやと云ふ間に對して余の答ふる所は、上  
來の記述に従つてリツケルトの其とは同一なるを得ない。余は經濟學の認識  
目的は唯一のみあり得而して唯一のみならざるべからざること、亦他の特殊  
經驗科學の何れにも等しからざるべからずと思ふのである。依つて次に起る  
問題は、經濟學は自然科學に屬するや又は史學に屬するやと云ふことである。

余は此の點に於て既に多少の思索を重ねて其の結果を經濟學認識論の若干  
問題なる前掲小論文の中に述べて置いたが、畢竟するに經濟學の對象とする所  
は人類の經濟生活にあること勿論であり、而して其の經濟生活と云ふのは人類  
文化生活の一面的解釋なることは亦疑を挿むべくもない。而して人類の文化  
生活全般は、單純に去來する波濤の如く前後に動搖する心理的運動の總體に過  
ぎざるものではない。其處に一定の歸趣があり、目的があり、規範がある、即ち價  
値生活としてのみ意義がある。價值を認めざる處に人類の生活は文化と何等

の交渉を有し得ない。其の心理的運動は自然科學的心理學の對象となり、一般  
者 (Jas Allgemeine) に攝取せられ終つて、價值に係はらしめて初めて可能なるべき  
文化生活としての意義は其の裡に其の處を見出し得ない。經濟生活も亦其が  
單純に經濟なる概念に制約せらるゝの故を以て、其丈で既に文化生活として或  
特定の文化價值に係はらしめずしては考へられぬこと、恰も倫理生活、美的生  
活、法律生活、宗教生活が各特異の意義を有する規範の實現を吾等の經驗的歴史  
生活の中に求むる要望なく、従つて何等の交渉を文化價值に有せしめずして解  
釋せんとするときは、全く意義なきものとなる。其の關係全然同じである。經  
濟なる概念は從來の經濟學者の論ずる如く、一切の時と處とを離れて人類の慾  
望より出發して形成せられ得と信じられたるは、凡ての心理主義 (Psychologismus)  
に共通なる論理上の缺陷として、經驗素材の個々のなるを統一の認識に導くべ  
き先天的原理と範疇とを其の行論の前提となしなから之を顧みるを忘れ、却つ  
て之を以て斯學本來の認識に導くべきことを阻害する所以なりとしたるに出



づ。(10) 而かも經濟の概念に於て認識の統一に導くべき原理と範疇とは國民經濟交換經濟貨幣經濟の如き歴史的概念が何等かの意義に於て介在することなくしては到底立せられ得ぬものである。然らば即ち此の如き經驗的歴史生活としての經濟生活を論理上可能ならしむる所以の經濟的文化價值に係はらしむることなくしては亦經濟の概念も形成せられ得ないと云はねばならぬ。換言すれば此の如き經濟概念に制約せらるゝ吾々の經濟生活は文化生活の一面的解釋なりとするに於てのみ意義がある。

(10) 前出カント認識論と純理經濟學參照

此の如き意味に於ける經濟生活を認識對象とする經濟學の認識目的が法則科學的たり得ざることとは明であつて、余が經濟學を以て歴史學に屬すと見る理由も茲にある。此の如くして概念的改造を経たる經濟生活に於て、或は更に單一化概念構成を試みる事が出来る、其の成果は經濟史である。或は普遍化概念構成を試みる事も出来る、所謂理論經濟學は是である。而かも後者が尙經

濟學たり得る爲には、斯學本來の認識目的を失ふ迄に普遍化概念構成を行ふことを許さない。即ち此の意義に於て所謂經濟法則は到底自然法則たり得ないで、飽く迄所謂歸納的經驗法則の範圍を出づることを許さないと云はねばならぬ。若し此の範圍を逸して自然法則が求められ又實際に求められたる場合に於ては、其の認識の成果は自然科学的心理學あるのみである。最早經濟學ではない。茲處には斯學特有の他學と區別さるべき認識目的は其の影を潜めて了ふからである。(11)

(11) 前掲拙著參照

以上の意義に於て經濟生活は到底歴史的文化生活であり詳しく曰へば其の一面的解釋である。即ち經濟生活は歴史的生活として文化價值に係はらしめて初めて論理上可能となり得る所の價值生活である。既に一個の價值生活である以上經濟生活が超越的文化價值なる規範を實現する過程として見らるゝに於てのみ經濟生活の努力に意義がある。經濟文化の方向を指し示し其の歸



趣たるべきものは規範としての不許不としての、經濟的文化價值即ち是である。余が茲處に經濟的文化價值と稱するものは、經濟學の認識目的としては史學一般の認識目的に對して既に、經濟的なる内容的制約を經たるものである。而も史學一般の認識目的としての文化價值一般が、其の係るべき範圍内に於ては形式的たるが故に、認識素材として與へられたるものに非ずして、寧ろカントの用語例を襲ふて認識問題 *Erkenntnisfrage* なりと考へざるべからざる如く、經濟學の内面より觀察すれば、經濟的文化價值は又此の意義に於ける一個の認識問題でなければならぬ。二個の不許不、規範に於て内容的制約が異なる程度に於て存在するとは、其の各の係る範圍内に於ては各自共に形式に過ぎざることを妨ぐるものではない。而して其の之を形式なりとする所以は其が必然的、客觀的、普遍的妥當性を要求するが故である。若し經驗の事實が、唯一絕對のものであるとするとき例へば真理の意義を實用論者の云ふが如く人生に有用なる知識とし、善の意義を功利論者の云ふが如く最大多數の最大幸福とする如く、正義

の意義を權力論者の云ふが如く權力なりとし、美の意義を心理論者の云ふが如く快感にありとするが如くんば、吾等は之を單純なる命名の問題と見るときは何等の問題も起さぬが、若し之等の經驗論的傾向に従ふ論者にして、真理の意義、善の意義、正義の意義、美の意義を説くものとして即ち吾等が附する眞善美、正義の妥當性を有するものとして認容すべしと要求するものあらば、吾等は此の場合直に、何故、にとの問を發することを禁じ得ない。而して彼等は何故にと問はれたるときに其の妥當につきて何物をも答ふことを得ない。即ち吾等が問ふ所は人生に有用なる知識を真理と名くるやと云ふのでなくして、何故に真理の妥當性を與ふるかと云ふことである。最大多數の最大幸福に何故に善の妥當性を與ふるかと云ふことである。權力に對して何故に正義の妥當性を與ふるかと云ふことである。快感に對して何故に美の妥當性を與ふるかと云ふことである。妥當は實在 *Realität* に附着せる屬性でもなければ妥當性を有すべき規範は或實在に對する代名詞でもない。即ち命名の問題に過ぎざるものではな



い。反對に妥當性の問題定まつて、初めて命名の問題に移り得るのである。真理の妥當性先づ定まつて初めて真理は人生に有用なる智識たり得るかゞ定めらるゝ。何ぞ泥んや直ちに人生に有用なる知識即真理と稱する命名問題を提げて妥當性の問題を決せんとする淺薄なる論理上の逆轉を許さんや。時に真理は——若し有用なる用語に意義あらしめば——人生に無用なる知識たり得べきなり。經驗的心理主義者に共通なる論理上の缺陷は凡て命名問題を以て妥當性の問題を決せんとするにある。

妥當は此の如くして代名詞でもなければ、屬性でも無く、附着物でもない。即ち一個の要求を意味する。而して其の要求は遇然的なる個々の經驗主體の或者及び或場合に限定することを許されぬと云ふ意味に於て、必然的なるべく、客觀的なるべく、普遍的なるべしと云ふのである。此の意義に於ける要求は夫故に經驗内容に内在的に附着する能はざるは、尙因果律が個々の經驗内容の中に在り得ざると趣を同ふして居る。個々の内容を超越して、之を統一する一範疇

の形式としてのみ、因果律が存在し得る如く、妥當たるべく要求する規範は人生に有用なる又は無用乃至有害なる知識、最大多數の最大幸福乃至最小數の最小幸福、權力又は無權力、快感乃至不快感又は惡感等の雜多の經驗内容の何れにも與らず、經驗内容の何れをも超越せる、換言すれば論理上に先天的なる、之等の雜列に於ける經驗内容を統一に導く形式でなければならぬ。此の形式に照應せられて雜多の經驗内容は、各其の處を得て各の意義を有するものと見らるゝに、より意識内容一般が統一を保持するを得るに至るのである。規範は各經驗内容の何れかの一と同一者たり得ない、又其の何れにも共通なるもの、抽象でもない。經驗内容を統一に導く形式であるが故に、其の反面に於て又判斷意識一般が、依つて以て意義を有し認識論上成立し得る所以の形式たり得るのである。

*Exkurs über die Dialektik*——此の點に於て考ふべきとは *Thesis, Antithesis* 及び *Synthesis* を以て進む *Dialektik* の意義である。「正」が「反」を産み其の兩者の綜合として「合」を生ずるとする發生的思想に於ては、畢竟するに一より他に進むときに吾々の思惟上に於て常に之を飛び越すを要求する。吾々は此の場合に「合」を以て「正」と「反」



との兩者を統一に導く形式に等しきものとして考へ得られざるか。此の「合」により「正」「反」とは初めて「正」たり「反」たり得て、其の各の處に其の意義を有し得るに至るのではないか。「正」たり「反」たる意義は正に「合」あるに於てのみ意義があるのみならず「正」たり「反」たる各判断は「合」に依つてのみ全體の統一を保つのである。ヘーゲルの *Dialektik* が此の過程を無限に導きたるは「合」に内容を與へたるが故である。内容を有する正(判断)は其自身に反(判断)を豫想せずには置かぬ、即ち正、反、合の過程を無限なりとしたるは發生的思索に基く當然の結論に過ぎない。發生的思索は内容を離れては無意義であるからである。此の場合に「合」に内容を與へずして正、反の超越的形式なりと考ふるに於て正、反を超越して而かも之に係はりて存在し得る理由が明になり得ると思ふ。

今經濟生活をして認識論上可能ならしめ兼ねて其の歸趣を示すべきものとしての超越的、經濟的文化價值は、人類文化生活の一面的解釋としての經濟生活の内面より見ては、正に上述の意義に於ける一個の規範であり、一個の形式である。茲處に客觀的、普遍的、妥當性は要求せらる。従つて經濟生活たる經驗内容の如何なるものと雖も規範たり得るものではない。此の點に於て經濟生活乃

至其の改造に於て一定の内容を豫想し、之を規範として經濟生活、經濟政策を律せんとする凡ての試みは事實上の努力の價值如何は別問題として、論理上は矛盾たることを免れぬ、こは余が他の機會に於て既に述べた通りである。(12)

(12) 前出經濟政策の歸趣参照

即ち規範は此の意義に於て、形式たるに於てのみ意味がある。經濟的文化價值は形式たるの意義に於て之に係はりて初めて經濟生活は認識論上可能となる。乍併規範は要求を意味し且要求する力を豫想する。此の方面より觀察すれば、經濟生活は經濟的文化價值なる規範に對し、價值に對して其の要求に應ずる過程なりと解釋し得べきである。換言すれば經濟生活は經濟的文化價值なる規範を實現する向上的過程を意味する。更に換言すれば經濟生活とは他の一般人類文化生活と同じく、其の規範たる經濟的文化價值なる形式を内容的に論ずれば、カントの所謂一個の  *Idee*  と見るが故に經驗世界に於ては之に出來得る丈充實せる内容を與へて、其處に客觀的、普遍的妥當性を得んとする不斷の努



力の過程を指稱するものに過ぎない。即ち經濟的文化價值なる規範は、此の意味に於て經驗的なる人類經濟生活に對して歸趣を示すものであり、理想を示すものであり、問題を示すものである。而かも其の形式に内容を與へんとする方面より論ずれば、其の實現は畢竟するに不可能と云はねばならぬ。規範は内容の觀點よりしては一個の *Idee* に過ぎずして、*Gegeben* せられたるに非ず *aufgegeben* せられたるものである。故に實現の期あるを知らない。只其の歸趣を示すものとしてのみ其處に價值が認めらるゝのである。悠々として五千載、只一抹の煙に似たりとするも、吾等の努力は常に理想に活くとするは只是が爲である。

茲處に經濟哲學は其自身の問題を有する。經濟哲學は一個の價值學としては、其の對象として超越的經濟的文化價值を規範として、不許不として、形式として有するに過ぎない。發生的思索に従ふものは、茲處に形而上學的實在を思はざるを得ざるは當然であるけれども、認識の對象として其が到底可能なり得べからざるは、カント既に一百年の昔に之を示した。而かも尙吾等の經驗的經濟

生活に於て、普遍的妥當性を有する内容によりて、完全なる價值實現のあり得べきことに疑を挿むことを欲せぬものは、其の人只信仰に生くるものと云ふべしである。之に反して、經濟哲學は、只一個の學として而して一個の價值學としては、經濟的文化價值なる規範に係はらしめて經濟生活を可能ならしむる所に認識論的根基を與ふるに止まらず、更に其の價值の妥當性が客觀的普遍的なるを立證し、且經濟生活が價值實現の過程なりと見られ得るによりて、經濟生活の歸趣と意義とを經濟的文化價值の中に示すことに於て其自身の問題を有する。更に此の如き經濟的文化價值の他の文化價值に對する關係を究め、茲に客觀的に統一せられたる價值世界を論ずるは、廣義の歴史哲學の任とする所でなければならぬ。此の意義に於ける客觀的超越的價值世界は、更に經濟哲學に對して其の問題の方向を指示するものである。茲處に學問全般の最後の歸着點が横はる。此の問題の解明あつて、初めて吾等の學的良心は其の安靜點を見出し得たりと云ふべきである。——*per aspera ad astra* I (大正五年六月廿五日稿)



## 經濟哲學の可能性

(大正六年元旦號日本及日本人所載同題文訂正)

「人は社會的動物なり」との古への哲人の言は人を部分的でなく其自身に完了したる全部として解釋する上に於て缺くべからざる出發點である。其の謂は、人なる一個の生物學的生理學的動物が、文化の衝動者であり、指導者であり而して其の完成者であるに於て、其の意義を盡すと云ふにある。文化は此の意義に於て人をして生れしめ、活かしむる根原であり而して目標である。政治、經濟、法制、文學、美術、音樂、倫理、宗教、學問等一切の文化的所産は、夫々の各時代の狀態に於て、吾等人間の此の目標に向つて進む努力、經過の一里塚に等しいものと云ふことが出来る。一步一步過去の成果に常に若干の結果を加へて一の段落を過ぎて更に又次の段落に近づかんと吾等は努むるのである。大なる人物、偉なる學者、驚くべき天才は其の段落に大なる一里塚を立て、吾等をして鋭氣一番更に洋々たる前途を望むで進むべき方向を指し示すものと謂である。其の努力の目標

に至つては、吾等と天才との間にも差別あるべからず、同一でなければならぬ。吾等と天才との差は、人文發展の歸趣に對すれば、吾等も、よくぞ人に生れたるが故に、程度の差であらねばならぬ。天才とは所謂一里塚の上に立つて、吾等凡才に吾等の進むべき途を、手を舉げて指し命ずるものと謂である。而して手を舉げて指し命ぜんには、吾等人類の全體が探つて進むべき前途に輝く星の光を最も明に認め、之に對して捧ぐる敬虔の念最も深きものであらねばならぬ。天才を目して狂者に近しとするは此の最も深き敬虔の念に共鳴を感ずる能はざる吾等凡才の淺ましさを自白するに外ならぬ。而かも吾等も天才の業に全く無關係なり得とは思ひ得ない。探つて進むべき途は、天才に對しても吾等凡才に對しても唯一あるのみであるからである。

此の意義に於ける吾等人類の努力及び其の經過は、正さに人類生活全體の内容を形造るものであつて、所謂生活内容の豊富なると貧弱なるとは、其の此の如き努力及び經過の方向並に其の各々に於ける分量に關して云ふものである。かくして吾等人類全體の各方面に於ける不斷の努力の總體は吾等有する文明の唯一の内容であると云ふことが出来る。



此の如き意味に於ける努力其自身を假りに名づけて内的と稱し得べくんば其の此の如き努力及び經過を考へ、吾等が有し而して有すべき文化の歸趣に照らし合せて其の意義を察する哲人の業は、之を稱して外的又は批評的と云ふを妨げぬ。即ち文明のある所、文明批評はあり得又あり得べき可能性を有する。其の可能性を有する故他なし。吾等人類文明の意義を釋れて其の歸趣を明にするは、是やがて所謂内的努力に根基を與へ、其の趣向を指示し、兼れて之を完成せしむる所以であるから、之に依つて初めて内的努力其自らが「可能」となり得るにるのである。此の意義に於て、所謂外的努力は即ち内的努力其自らに深く根ざし、其自らに與り、仍つて其自らの重要な一部を形成することを得るに至るのである。即ち吾等が有する文化的産物としての學問、倫理、藝術、宗教、法律、政治の意義を尋ねて其の歸趣を考ふるものとしての論理學、倫理學、美學、宗教哲學のありと、共に、法律哲學、政治哲學のあり所以、其の可能性は明である。何故に獨り經濟哲學はあり得ざるか。

余不幸にして未だ一個の體系として經濟哲學の説かれたるものあるを聞いたことがない。國によつては經濟哲學なる成語すらあるを聞かないものもあ

る。然らば經濟的文明なるものあり得ざるか、或は經濟的文明なるものありとして、其の此の如き人類の努力を考へ、其の意義を闡明し、其の趣向を研擧すべき經濟的文明批評の學としての經濟哲學なるものあり得ざるか。之に對して余は共に之を肯定するものである。即ち余は各方面に於て、各特異の性質と歴史とを有する文化生活のあり得と同様に經濟的文化的存在を肯定し、而して此の經濟的文化的意義と歸趣とを釋ねべき經濟哲學の可能性なることを固く信じて疑はざるものである。而かも余の寡聞不學なる、學界未だ曾つて經濟哲學の可能性すら提唱するものに遭うたことがない。吾等は茲處に最も原始的の意味に於て學問上の未拓境を有するのである。

歐洲交戰國の經濟を談じ、財政を論じ、食料問題を考へ、勞働問題の趨勢を察するものも經濟學者の任であるに相違ない。増加したる我國在外正貨の處分を是非し、減債基金問題を論議するも亦經濟學者の責務たるを妨げない。併し之等の經濟的文明の努力に直接交渉を有する政策問題を口にするに専らなる經濟學徒も、他方には此の如き經濟政策乃至其の之により生ずる努力の全部より成る經濟的文明一般の根基を考へ、兼れて其の意義を尋ねべき經濟哲學は未だ其